
廻らない世界

ネコヌマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廻らない世界

【Nコード】

N9894M

【作者名】

ネコヌマ

【あらすじ】

これまで何百もの望まぬ転生を繰り返してきた主人公。今度は人間がいいなあーなんて考えていたら中国っぽい所に転生したわけ。しかも有名どころは女性なわけで・・・

この作品はアンチ要素を含みます。原作の主人公が好きな方はスルーされることをおすすめします。

これまでは被害者（前書き）

この作品はアンチ要素を含みます。原作の主人公が好きな方はスルーされることをおすすめします。

これまでは被害者

<?????side>

輪廻転生という考え方を知っているかい？

簡単かつ手短に言ってしまうえば、「死んだら次はまた別の何かに生まれ変わりますよー」という考え方のことだよ。

なんでこんな話をしてるのかというと、俺がその被害者だからなんだよね。うん。

別に21世紀頃の二次創作であつた「間違つて殺し……」とかじゃないよ？

むしろそののが何億倍もよかつたろうしねえ。僕はあくまでも被害者。彼らみたいな恩恵は一切なし。大体……………

あー、うん。脱線したね。まあ話をもどそう。

それでね。基本的に転生は「記憶の消去」、つまりは「魂の洗淨」を行つてから次の生に移行するわけなんだ。たまりに洗淨がうまくいかなくて、前世を引きずっちゃってるのもいるみたいだけど、それ以外は大抵はその器に合わせた生活を送れるようになってるわけだね。人の前世を引きずつたまま猿の器に入ったら大変でしょ？

でもまあ、俺があつていいる被害はその中でも異端中の異端と言えるだろうねえ。うんうん。

それは『魂の洗淨が利かない』ってことなんだ。

つまり、転生しても前世の記憶を持ったままってことなんだよね。今じゃ慣れてるけどさ。

最初に猫になった時はしんどかつたなあ。だって、初めての転生が

猫だよ？しかも中世ヨーロッパ。黒猫っただけで追いかけるし、悪魔の使いとか言って殺されたしさあ。その次の生で猫の癖が抜けなくて異常者呼ばわりされたし……。はあ・・

と、とにかく、俺は何度も転生を繰り返してるわけです。

それで現在転生待機まつ最中なんだ。

転生って言っても一瞬で終わるわけじゃない。いくつか工程があるんだよ。

「死ぬ↓浮き上がった魂の回収↓洗浄↓器の選定&待機（今ここ）

↓新たな器へ」

てな感じでね。

魂が浮き上がるっていうのは、その自我の終了のこと。浮き上がった瞬間に考えるってことがなくなるみたいだよ。

あー何でそんなことがわかるかというとな、聞いてみたことがあるんだよね。ほかの魂さんに。洗浄待ちの時にさ。

でもねえ、だーれも答えてくれないし、聞こえてるのかすらわからないスルーっぷりでね、ずいぶん落ち込んだんだよね。

だから考えてみた結果そうなんじゃないかなーって。俺以外の被害者には会ったことがないから、仮説の域を出ないんだけどね。

あ、そろそろ器決まったみたいだね。犬・人・魚ときたから、今度是人がいいな。忘れちゃうんだよねえ人らしい生き方。

お。そろそろ……

「おぎゃー（あー）」

生まれたみたいだねえ。うん、今生は人だ。

あー。やっぱり生まれてすぐのこの感じには慣れないなあ。特に口の中。周囲の眩しさ。うん、しんどい。

「徳謀様お世継ぎが生まれましたぞー」

ドドドドドドド

ドシャグシャメキヤ

「ううまれたか」

「あうゝ（うわぁ）」

あれー、今すごい音なつてたよねえ。というかこの人が父親さんですか。なんて言うんですかねえ。ひげ。うん。h i g e

「よしーよし。愛い子じゃなあ。自分の子とは、かくもよいものだとは思わなんだ。あー愛い愛い愛い愛い愛い愛い愛い愛い……」
あー。父親殿は親ばかりのようですねい。それよりh i g eが痛いです。

「あなた、それよりもその子の名はどうしたのですか？」

おー母親さんですかー。なんだかふんわりした感じの人ですねえ。栗色の髪がずいぶんとよく似合う。

「そうであつた。うむ。お前の名は、程禁柳蓮、真名は暁じゃ」

「あーうー？（真名あー？）」

なんですかねえ、真名って。

「おお。返事を返したぞ流。ああなんと愛い子じゃ。先日見た策殿よりも何億倍もいい。さすが我が子。いいスゴクいい！！」

………このh

i g eはほおつておこつ。なんという親ばか。

それよりも母親さん。旦那スルーしてごはんくれませんかねえ。

あ、くれるんですか。

うん。そのくらいで。

「はい、とんとん」

「けぷ」

ああー口の中がヒドイこっ……眠い。

あ、h i g eが母親さんに黙らされてる。騒ぎすぎるのはダメですよねえ。

でも、今生はなかなか良さそうです。

目を覚ますのが楽しみですね……………

そんなわけで俺こと暁^{あき}の今生が始まったみたいですよ。

1 はじめての自由（前書き）

こんにちはこんばんは。のってるうちに投稿です。
基本的に主人公sideで物語は進んでいきます。主人公はだるゝ
んな感じなのでいろいろとご容赦を。因みに呉ルートです。あしか
らず。では、はじめります。

*9/14改訂いたしました。

1. はじめての自由

姉さん事件です。

なんと、魂が定着しました。もう一度言いますよ。魂が定着しました。

二度言いましたよ。大事なことですからねえ。

以前、俺が被害者であることは話したと思うんですが、被害にあい続ける原因については不明だったんですよ。

でもですねえ、今生でわかりました。というか解決しましたよ。

浮いてたんですよ。

今まで。

わかりやすく言うと、普通に輪廻転生が行われている魂を「魚」とすると俺は「船」だったんですよ。

「魚」は海や川という器の中にいるわけですよ。でも「船」は器に入りつつも浮かんでるわけですよ。

つまり、何が言いたいかというと「魚」の状態になったんですよ。

それだけだと、ただ器に入っただけで被害終了とは違うんじゃないかい？

なんて感じもしますけど

違います!!

ええ、違いますとも。

遡ること半年前、風邪をこじらせたんですよ。

死にかけるくらい。

ええ。死にかけましたよぉ。

その時ですね、またかあなんて考えていたんですけどね。違ったんですよ。

ああ浮いてくなくなと思った瞬間、思考不能になったんです。

今まで何度繰り返しても可能だった、思考ができなかったんですよ。

焦りましたよ。

でも、同時に理解しました。

自由だ。

てね。

おぼろげには感じてたんですよ。なんていうか型にはまったような安定感を。

それを理解させられたって言うんですかねえ。

とにかくこの次はきつとないって、きつと今足掻かないと、今まであった”次”がないんだって。

だから、必死に「生きよう」としましたよ。

ああいうのを本能っていうんでしょうねえ。

今まではとんと忘れてましたよ。

その後、意識が戻ってからはもう、泣きましたよ。泣き疲れるまで。父上も母上もひたすらにおろおろしていて、久しく感じていなかった家族ってものを感じました。

それがまた新鮮で、安心できて、どうしようもなく号泣してしまつたのは良い思い出、ってやつにしておきましょうねえ。
ええ、そう言うことにしてください。

俺は、今、幸せなんです。
それでいいでしょ？

まあそれ以来生きることが楽しくってしょうがないんですよ。

母上に読み書きを習ったり、父上ことh i g eに遊んでもらったり。

ああ、そうそう。

驚いたことに、父上は程普徳謀、真名は千里っていうらしいです。
つまりは三国志の人物なんですよ。

最初はまさか、って感じだったんですけどね。

ある日、父上が仕えているという堅殿について聞いてみたんですよ。
何故なら、家に帰ってくるたびに、その堅殿の娘と俺を比べるんです。

勿論親ばか全開で、です。

そんなぞんざいにしていい相手なのか、と思ったんですが……

それが孫堅文台だっていうのだから……もうねえ。確定ですよ確定。

というよりも、孫家大丈夫なのかなって不安になりましたよ。

だって、いつも昼になると抜けてくるんですよお仕事。このh i g eは。

遊んでくれるのはいいんですけどねえ。仕事してるのかなあ。
文官だっていうのに……はあ。

それにねえ、父上。追いかけて馬はないんじゃないかと思えますよお。こっちは幼児ですよー。おーい聞いてますかあ？

まったく。母上も「なかよしさんねえ」じゃないですよお。

止めてください。楽しいが苦しいに変わってきてますよ……
はあ。

「おお、そうであつたそうであつた。忘れるところであつた」
なんですかあ父上え。食事中ですよ。

「どうしましたあ父上」

「うむ。暁よ、明日は朝から堅殿のところに行くからの。準備しておくように」

……はい？

このhigeは何とおっしゃいました？

「父上、今なんと？」

「明日は堅殿のところに行くから準備しておくように、と言つたぞ？」

母上は……ニコニコしてますねえ。

ああ、きつと準備とかはもう終わってるんでしょうねえ。……

・はあ。

つまり心の準備をしておけと。

「わかりました父上」

「そうか。では、今日は早くに寝るようにな」

「ええ。ではもう休むことにします。父上」という名のhige、
母上」

「ああ、おやすみ。暁」

「おやすみなさい。暁」

こうして俺は三国志の世界で初めての自由を手に入れた。
後ろから「今日は暁と寝るんだああ……！」

と言う幻聴が聞こえてきたが、幻聴は無視するに限ります。

イチイチ気にしていると変な人に見られますからね。

そんなことよりも・・・・・・・・・・はあ。

明日が怖い。

1・はじめての自由（後書き）

お読み頂き感謝です。

今回はネコ又マの大好きなお二人に登場していただく予定です。

そのうちあとがきももっと碎けていくつもりですが・・・どうしよう？
とにかく、次回もよろしく願います。

2・流れる時間の中で（前書き）

まあだまだいくよぉゝ

* 9 / 14 改訂いたしました。

2・流れる時間の中で

みなさんこんにちは暁です。

あれから堅殿のところに行きましたよお。

ええ行きましたとも。

行ってびっくりってやつでしたけどねえ。

父上が仕えてる方っていうからどんな所に住んでるのかと思えば、ふつつのお宅でしたよ。

どれくらい普通かというと、我が家と同じくらいの大きさだった、とても言っておきましょう。

うちの父上はこの郡の文官の中位らしいので割と普通の家庭ですよお。宮仕えにしては。

格式の高そうな家だったらどうしようかと心配だったんですが、これで少し安心です。

それよりも驚いたのは、堅殿って女性だったんですよ。

しかも、かなりの美人。

武官などではないそうで、今は義勇軍を率いているそうです。

父上のことについては、もっと大きな勢力になった時に仕官してもらうとのこと、今現在は父上が勝手に言っているだけのようです。

ああ、旦那さんの鍊さんにも会いました。

何でも、父上の同僚さんらしく温和な感じの人でしたよ。

父上が苦勞をかけていないか心配ですよ。

それから、堅殿達の娘さんが同い年とのことでしたが、現在よそに

預けているとこのことで会えませんでした。
まあ、その内またお邪魔することもあるでしょうし、そのときまでの楽しみにしておきましょうかねえ。

（5年後）

はい。一気に5年経ちました？

こんにちは、暁です。

あれからいろいろありまして、俺ももう8歳です。

最初に堅殿にあつてから半年後くらいに堅殿の娘さん伯符ちゃんと名門周家の娘さんである公瑾ちゃんの二人に会いました。

伯符ちゃんは元気いっぱいな子で、公瑾ちゃんは伯符ちゃんに連れまわされてましたねえ。実際は俺も一緒でしたが。

まったく、あの元気はどこから来るんでしょうか。不思議です。

二人にあつてからほとんど月に一回のペースで遊んでいます。

ああ、そういえば先日二人から真名を預けられましたね。

今度会った時は真名で呼ばないといけないんです。危ない危ない。

二人で思い出しましたが、仲b・・じゃなくて蓮華ちゃんは元気にしてますかねえ。

蓮華は真名で、三年前に生まれた堅殿のもう一人の娘さん、孫権仲謀ちゃんのことです。

俺を兄と慕ってくれる蓮華ちゃんは、一人っ子の俺にとって本当の妹のような存在です。

ただ、少し引っ込み思案なところがあって、兄としてはもう少し甘

えてほしかったりもするんですけどねえ。

「暁、冥琳、なにやってるのよー。早く、こっちこっちー」

おっと、お姫様がお呼びですかねえ。

「雪蓮、今行くよー。さ、冥琳行こっ」

「うん。そうだね」

雪蓮は伯符の、冥琳は公瑾の真名。だいぶ前に預けられたんだけど、ずっと呼んでなかったんですよえ。

恥ずかしくて。

いいじゃないですかあ。

別にさあ。

でもねえ、泣くんですよ。

二人ともさあ。

真名で呼ばないと、だからこっちは恥ずかしいなんて言ってられないんですよえ。

まあ呼んだ時は、それこそ一気に春が来たんじゃないかってくらいの笑顔を見せてくれるからいいけどさ。・・・・はあ。なんだか。

「むー。暁また難しい顔してるー」

「えっと・・・」

そんな顔してるかなあ？冥琳

「ええ。猿みたいにしわくちゃよ」

さ・・・さる・・・はあ。

「あはは冥琳の言うとおりしわくちゃ。はははは」

「ふふふ。雪蓮笑いすぎよ、ふふふ」

ぐずつ。猿は言いすぎだつて・・・

「ほおらあ、暁。落ち込まないの。ちゃんと私達が貰ってあげるから」

ああ右腕が。

「そうよ、暁」

うん。左腕が。

そうだね。二人が貰ってくれるんだもんね・・・は？
・・・はあ。まあいいかあ。

「じゃあ二人ともちゃんと捕まえててよお？」

「「ええー!!」」

ああ両腕が痛い。幸せって痛いなあ。

「まだ息子はやらんぞー！！！！」

h i g e 何やってんだよ。

寝言はh i g e 剃ってから言えよ。

そんなだから二人に距離置かれてんだよ！！

・・・・・・はあ。

h i g e (馬鹿) ばっか。

2・流れる時間の中で（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございます。

ネコヌマです。

今回はメインヒロインの二人に登場してもらいましたがいかがだったでしょうか？

作者としては「一人称だとつらい。よし次からside表現使おう！」な感じです。そこら辺は試行錯誤ですね。

では、次回もどうぞよろしく。

3・男らしく、でいじう（前書き）

さんになしうってなんだっけ

3・男らしく、でいじう

こんにちは、暁です。

なんだかんだで俺も12歳になりました。

二年ほど前に戦鈴さん（ああ堅殿の真名なんですけど）がこの地域一帯を治めるようになりまして、現在その中心地である建業に住んでるんですよ。

父上も自称家臣から脱却しましたしねえ。うん。

それでこの間初めて父上の仕事姿を見たんですがあ……なんですかねえ。あれ。

左右別々の竹簡をかたずけるとか・はあ。周り見て下さいよ。

ほかの文官さん涙目じゃあないですかあ。ごめんなさい、こんなhideが異常能力者で。

ま、まあ、なにより雪蓮や冥琳といつでも会えるっていうのが嬉しいですね。うん。最近抱きつかれると当たるんですよえ胸が。それがまた………内緒ですよ？

それに、体型だけじゃなくって、他にもいろいろと成長してるんですよ。

雪蓮は祭姉と訓練してるのをよく見るようになりましたし、冥琳は鍊さんに教わって政務の勉強なんかをしてるみたいです。

ああ、俺はですねえ。家庭教師兼小守、ですかねえ。

あのhideの子だからなのかわかりませんが、かなり頭の出来がいいみたいなんですよあ。

どれくらいかというとあ、冥琳と同じくらいですかねえ。

あの周家の鬼才と同じくらいですよ……はあ。
何よりも嫌だったのが……できちゃったんですよ。

h i g eと同じ真似が。

左右分割思考とでも言うんですかねえ。これ。

右で冥琳の話を聞きながら、左で雪蓮の話を聞く。なあんて芸当も
できますしねえ。

うん。割と便利ですねえ。

なんで判明したかというと、ある時父上の話に興味を持った冥琳が
ね、言っただけですよ。

「あんなh i g eに出来ることが私たちの曉に出来ないわけないだ
ろう？」

ってねえ。まあ、結局できましたけど……ねえ？

というか冥琳。なんか家の父上に対してきつくはないですか？

え？なんでもない？ああ、俺の気のせいですよ。キノセイダ。だ
からその”エガオ”をやめましょうねえ。ね？

とまあ、こんな感じの俺は孫家のお嬢さん方の家庭教師兼のお守な
んてのを拝命つかまつったわけです。

家庭教師兼お守、なんて言っても、結局妹の相手をしてるようなも
んですけどねえ。

蓮華ちゃんも大きくなってあまり手がかかりませんし、最近生まれ
た小蓮ちゃんは戦鈴さん自ら見てますから。まあお兄ちゃんですか
ね。

でもね、お兄ちゃんするのも大変なんですよ？

守らなきゃいけないからって、祭姉と訓練しなくちゃいけないです
しい。賊討伐にもつれていかれますし。

ああ、祭姉って言うのは黄蓋公覆さんの真名で、俺の10年上のわがままばでいの人。

あまり歳は言っちゃいけないんですけどねえ。気にしてるみたいですし。選り好みしてるから行き遅れなんて言われるんですよ。優良物件なんですけどねえ。

え？なんですかあ祭姉？歳についてなんか言ってたかって？

マサカトンデモナイ。

・・・・・・・・・・・・・・・・すいませんでした。

ん、んん。えー。美すぎる祭姉様に鍛錬のご指導を付けて頂いているのですが。いくつかわかったことがあります。それはあ、

- 1・弓の才能は皆無
- 2・どんなに鍛えても半刻以上の戦闘は不可能
- 3・刀？に関しての才能は異常者レベルの3つです。

弓はね、動作が体にしみないんですよ。馴染まないっていうのかな？祭姉にもどうあがいても新兵の域を出ないって言われちゃいましたし。

2と3はね、はつきり言っで、そうなんじゃないかなーって思い当たる節があるんですよ。

前世の影響ですねえ。うん。

やたらと関わりがあつたんですよねえ。剣豪に。

俺自身がそうであつたり、試し切りされたり試し切りされたり試し切りされたり・・・・・・・・あれ？

目から何か出てる？・・・・・・・・まあいいや。

で、ですね。剣豪って、基本的に長時間の戦闘ってしないんですよ。それよりも、どれだけ短時間に最大の力を出せるかにこだわってた

みたいで、その影響かなあと。

あとは、人以外の時。その時だって、狩りに時間なんてかけませんでしたしねえ。時間かけちゃうと逃げられたもんなあ。その影響か筋肉も大きくなりません。邪魔だものねえ。

？

こうして考えると、前世の影響ってかなりあるかも。

ま、いいかあ。

それですなえ、そこそこ使えるようになってある日、連れていかれましたよ。

賊討伐。

やりましたよ、賊殲滅。

祭姉曰く

「この程度の数の賊ならば、今の曉坊でも大丈夫じゃろ」とのこと。

まあやりましたけどねえ。

20人くらいだったかなあ10分位でなんとか、ね。

祭姉は苦笑してましたけど。

まあ12歳くらいの子供が普通に人を斬ってるんだから、そんな反応になりますよね。

そのあと帰ってきたら、父上対祭姉が始まってましたよ。黙って連れて行かれたみたいですねえ。これは。

関係ないつもりでいたら、雪蓮と冥琳につかまって質問攻めでしたねえ。

怪我はないか、とかね。

懐かしいなあ。涙目の冥琳の可愛さは異常です。ほんとに自重して

ほしいなあ。あと少しは。

”コンコンッ”

ん？誰か来たんですかねえ？
かなり遅い時間だと思っんですが。

「どうぞお

ん？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えと、雪蓮？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたの？とりあえず座ろ？」

「うん・・ありがと」

どうしたんでしょうねえ。雪蓮がこんなに静かなんて。

「ねえ、暁」

「はい」

「前に賊を斬ったでしょ？」

「ええ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ。そういうことかあ。」

「怖く・・・・・・・・なかった？」

「とても、怖かったですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・探してるんだね。」

「人を殺すことが？」

「ううん。違うよ。俺がねえ、怖かったのは・・・」

そう。この器に定着した『暁』たる俺が恐怖したのは・・・・・・

「雪蓮や冥琳。ううん。みんなに会えなくなるのが怖かった」

「誰かを殺すよりも？」

「うん。俺はねえ、見知らぬ誰かに殺されるよりも、大事な人を泣かせたくないからねえ。その為だったらいくらでも、ね」

「………恐怖のありかを

「そっか」

「うん」

嫌われ……たかな？

「ねえ、暁」

「ん？」

「今度ね、私も討伐に行くの」

やっぱりかあ。

「それでね」

「うん」

「暁は私の帰る理由になってくれる？」

つつ！！！！！！

はあ………君は本当にいつも俺を捕まえていてくれるんだね。

「もちろん。だって俺は雪蓮と冥琳のためにあるからねえ」

「………ふふっ。そうね」

「ああ。だから、ちゃんと捕まえててよ？」

そう。だから……

「ええ。いつまでも」

「「傍で」」

この腕の温もりをきつと俺は離せないから。

だからちゃんと帰っておいでね。

俺たちの所に。

3・男らしく、でいじう（後書き）

今回もお読み頂きありがとうございます。

後半甘目設定ですがいかがだったでしょうか。

なんだかんだで自分には主人公視点で進めていくのが楽なんじゃないかろうかと思い始めた今日この頃。

冥琳を甘くしたい。そんな今日です。

今回は冥琳を甘くした日常編が、雪蓮の初陣編のどちらかでいくつもりです。たぶん・・・

では、また次回お会いしましょう

主人公設定〱12歳まで〱（前書き）

祝4000PVを記念してあまり触れられなかった、主人公の容姿などなどいつてみようかと。
では、とぞとぞ

主人公設定（12歳まで）

姓：程

名：禁

字：柳蓮

真名：暁

身長：156？

体重：48？

容姿：こげ茶色の髪と小麦色の肌以外は殆ど「最も遊んだ旅の記録」に出てくる豚さん。現時点では眼鏡もモノクルも着けていないが、今後の展開次第ではありえる。俗に言う「痩せマッチョ」よりもさらに線が細い。

性格：のほほんとした人。基本的に「怒る」ということがない。身内に優しく・・・の典型であるが、身内以外には厳しいというわけではなく「興味がない」。

よく、敵対者には容赦がないという表現があるが、暁にとっての敵対者とは「自分の目の届く範囲の人に害を及ぼすであろうもの」を意味する。時々このくくりに「興味の無いもの」も入る。

「死ぬ」ということを誰よりも理解しているので、殺すことや生きることに対して厳しい価値観を持っている。

「賊は獣」という考えは好まず、本能を優先させた賊に対しては「半分人を辞めた存在」としてみている。

自分が人間であるということに誇りを持っており、だからこそ眼の届く範囲の人のみしか「救わない」。

また、極度の甘党。

好き：甘いもの、お茶、雪蓮、冥琳

嫌い：高圧的な人、渋いもの、糖分のない時間

雪蓮と冥琳：ほとんど相思相愛状態だが、たがいにはつきりと口に
していないため一歩が足りていない。

主人公設定〱12歳まで〱（後書き）

ああ〱

そ、そのうちもっと書くことが増えると思うので今のところはこの
辺で。

では、次回。

閑話―妹との時間―（前書き）

こんにちは、こんばんは。
息抜きに閑話始めます。

閑話―妹との時間―

こんにちは。暁です。

雪蓮が部屋に來た日から、7日経ちました。

賊なんていうものは、四六時中出るものじゃあないので、変わった日々の日々を過ごしてます。

ただ、少しだけ雪蓮との距離が縮まったような気がしますけどねえ。少し、ですけどねえ。

今日は、蓮華の家庭教師です。

蓮華は話をしっかり聞いてくれる真面目な生徒さんなので先生としては嬉しい限りです。

「兄様。何かいいことでもあったんですか？」

「んー？蓮華、どうしてそう思うんですかあ？」

「んー。顔にでもでてるんですかねえ。」

「だって、さつきからずっとご飯時の子供みたいな顔してるもの」

おやおや。これでも軍師志望で表情を隠すのは得意なつもりだったんですけどねえ。

ふふっ。そうですねえ。

嬉しそう、ですかあ。

「蓮華、すこし違いますよお」

「ええー。どこがですか？」

「嬉しそう、ではなくて、嬉しいんですよ」

「兄様。それって屁理屈って言いませんか？」

「ふふっ。屁理屈で結構。でも、俺の中では海と河ほどの違いがあるんです。蓮華もいつかは王になるんですから、人にはそれぞれ違った考え方が有る、ということ覚えておきましょうねえ」

「はい。兄様」

緩やかな時間

人として過ごす、
こんなひと時

閑話―妹との時間―（後書き）

かなり短めですが、蓮華の出番が皆無だったのでこんな感じで登場です。

次回も多分閑話とかじゃないかなあ。

冥琳分が足りない。

では、次回もよろしくお願いします。

閑話―冥琳―（前書き）

皆さんこんにちは。
遅くなりましたが、冥琳です。

閑話―冥琳―

む、おはよう。

周公謹だ。

突然だが、私には最近気になっていることがある。

それは、雪蓮と暁の二人に関することだ。

二人とも私にとって大事な・・・

いや、最愛の人だ。ふふつ。最愛が二人、というのも変な話ではあるが、そうとしか言いようがないのだから仕方ない。

そう。本当に、仕方がない。

おっと、話がずれたな。

この二人とは、もう十年近くの付き合いになるのだが・・・

どうにも最近二人の仲が進展している様な気がする。

なんというか違うのだ。気のせいや勘違いなどというものではなく・・・ハッ！！

まさか、雪蓮に先を越された？

いやいやいや。

まて、落ち着くんだ周公謹。

そうだ冷静になるんだ。すーはー。

ふう。

また脱線してしまったようだ。

どうにも私はあの二人のことになると冷静さをなくしてしまいがち

になる。将来軍師を志す者としては少々困りものだな。

さて、話を戻そう。

最近二人の仲が進展したようなのは、非常に喜ばしい事であるし、嬉しい。

雪蓮が暁を好いていることはもちろん承知しているし、月が二つにでもならない限り、暁も。

そうであるからこそこれまでの一步踏み出せない関係をどうにかしなければと思っていたのだが・・・
まさか先を越されるとはな。

ふう。あとで雪蓮にどうやったのか聞かなければな。

私の夢は暁と一緒に雪蓮を支えていくこと。

そして、雪蓮と一緒に暁を？まえておくこと。

その為には私も一步踏み出さなければな。

「冥琳。どうかしたあ？」

「いや、最近暁が冷たいと思つてな」

「ふふつ。寂しかったかなあ？」

まったく、こいつは。抱きついてものほほんと微笑むだけで驚きもしない。当たっているはずなのに慣れているとでもいうのだろうか。

・・・ん？・・・まさか・・・祭殿か？

いや、祭殿に限って・・・有り得る。む

しろ可能性がありすぎて見逃していた。

くっ！！私としたことが！！！！

これは早急に雪蓮と対策を考える必要があるな・・・

・・・

「おい。冥琳。もどつてーい……」
「あ」

閑話―冥琳―（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます。

現在帰省中でして、ペースは遅めになるかもしれませんが。

冥琳ですが、あまりデレてませんね。ネコ又マ的にはもっと当分多めの展開になるかと思うんですが、空回っている感じです。冥琳、恐ろしい娘っ！

今回はようやく本編が進みます。多分キングな真紅で五年くらいふっ飛ばすと思います。孫堅をどうするのかはまだ考え中です。

とりあえず、次回もよろしくおねがいします。

では、さよなら。さよなら。

4・花・薔なれど（前書き）

皆さんこんにちは。

and

お待たせしました。

難産でした。

難産でした。

やっぱりパソコン使えないと効率悪くて困ります。

今話は、次回への導入のつもりで書いたので、会話とかありません。
その分、次回は頑張るので大目に見ていただけると幸いです。

では、ご覧ください。

4・花・蕾なれど

- 3 side -

結局、孫策の初賊討伐はあれから10日ほど後のことだった。

賊討伐から帰ってきた孫策は、多少の興奮状態にあったが、初めての殺し合いの後ということを考えると大いに満足のいく結果だったといえよう。

しかし、孫策はこの後も戦場に赴くたびに破壊的な興奮ではなく、性的な興奮を覚え続けていくことになる。

人が数多く死んでいく戦場で性的な興奮を覚える、というのはいかにもまずいように思われるが、実のところそうではない。

自他共に気が付いていないことだが、彼女に影響を与えているのは強者との戦いや、命のやり取り、所謂『スリル』で興奮するといった狂気じみたものではない。

彼女のそれは種を残そうとする強い本能によるもので、のちに王になる可能性を考えると、「天に愛されている」とさえ言えるだろう。

何故ならば、王とは自らの血筋を絶やしてはならないからである。

血筋を絶やさない、というだけでも、ある意味一つの業なのだから言い換えると、子をなせない王など王ではないとも言える。

後宮というシステムはその顕著な例と言えるだろう。

孫策のその衝動は、後に孫策を第一と考えている二人の人間に多くの影響を与えるのだが、それはまた別のお話。

とにかく、彼女たちの関係が劇的に変わった、とだけ言っておこう。それは、まあ、色々。

（6年後）

6年、という時間は確実に何かを変えていく。

それは、軍師見習いが軍師になるには十分で、友達から恋人になるにも十分すぎる。誰しにも、確実な変化と共に時間は流れた。

程禁は十五歳の時に文官と武官、両方に仕官した。理由は言わずもがなだが。

それまでの仕事であった、家庭教師兼子守は、子守役を甘寧というものに任せることにはしたものの時間がある限り家庭教師役は続けている。他に、変わったことと言えば、教える対象にもう一人の妹が加わったくらい、であろうか。

周瑜も程禁と同じ年に文官になり、数々の戦場を経て、軍師として頭角を表しつつある。

もっとも、呉内には某h i g eを筆頭に、内政に優れた文官が多く、必然的に軍師としての仕事が多かったということも関係しているのだが・・・・・・・・

また、これはあくまでも噂だが、某h i g eとの仲が余りに悪すぎて、妥協点としてこのかたちに落ち着いたとか、なんとか。

孫策は初陣以来、常に母である孫堅の後について回るようになった。それは、母に甘える娘の姿ではなく、次代の王として王とはどうあ

るべきかを模索する王族としての姿であった。

王の姿は民を照らす。

王たろうとする彼女の様も誰かを照らしていくだろう。

今はまだ蕾なれど。

4・花・薔なれど（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマです。

今回独自解釈で王族としての仕事なんてもの出してみましたけど、どうだったでしょうか。

次回はなるべく早く書き上げるつもりですが、

と、とにかく、次回もよろしく願います。

花、咲く時を待ち（1）（前書き）

みなさんこんにちは。

ネコ又マです。

今回は早めの投稿です。

頭の中で、某吸血鬼の方が「ハリーハリーハリー」五月蠅かったの
で頑張ってみました。
では、どうぞ。

花、咲く時を待ち（1）

こんにちは。暁です。

みなさん元気でしたかあ？

ん？

みなさんって誰でしょう？なんだか気にしてはいけない気がしますねえ。

うん。やめておきましょう。

さて、お仕事でもしますかあ。ねえ。

俺は普段、文官と武官両方の仕事をしているんですが、文官のお仕事は割と暇です。最近文官になった陸家のお嬢さんが優秀で、大抵の仕事をこなしてくれますしねえ。

こちらを見る目が少々怖い気はしますが……気にしないでおきましょう。

うーん。だいぶ暇そうですねえ。

うん。今日は武官の仕事だけで済みそうです。

そうですねえ……。早めに終わったら蓮華たちのところに行くのもいいかもしれませんねえ。

まあ、とにかく仕事に行きましょうか。

「程禁様。いらつしやったんですか」

「ああ、気にしなくても大丈夫ですよ。それよりも調練はどうですか？」

「は！滞りなく進んでおります」

「具体的にはどのくらいですかねえ」

「具体的に……ですか。そうですね。錬度自体は中堅の兵士と変わりないかと。ですが、やはり経験が足りませんな」

やはり、ですかあ。

最近は賊にも目立つた動きはありませんし、どうしたって経験不足になりがちですからねえ。

「ふむ、そればかりはどうしようもありませんねえ……。わかりました。何か考えておくとしましよう」

「は！了解しました」

「では、今日はいつもの調練の後、半数に分かれて模擬戦をお願いします。当分は模擬戦を工夫してのぐとしましよう」

「は！そのようにいたします」

今のところ、それくらいしか方法はないですしねえ。

「ではよろしく願いしますねえ」

調練自体に俺が口出することって、あまりないんですよえ。

この隊自体が祭姉からの借り物みたいなものだし。

部隊運用の練習みたいなものだしねえ。

ん？自分の部隊？

あるよお。

けど、あんまり外に出していいような部類のじゃあないからねえ。

今はそれぞれ別行動。

大体、部隊といっても、まだ20人にも届かない人数しかいないからさあ。

集団での訓練とかできないっていうのも理由だけどね。

んー。でも今どうしてるのか気になるなあ。
ううん。多分いると思うんだけど……………

「虎、いるか？」

「是」

……………やっぱりいたよ

「ちなみにだけどさあ、いつから？」

「訓練開始時から控えておりました」

「あゝ。やっぱり」

虎。俺の部隊の副長。黒髪の系目美人だ。

何の因果かはわからないが、俺に絶賛ベタ惚れ中らしい。

何故かはわかりませんが。

彼女に聞いてみても「生まれた時から愛してました」としか答えてくれませんし。

理由もなく好かれるのは少し困りものですよ。

雪蓮と冥琳の視線も怖いし。

「隊のほうは？」

「滞りなく」

「そうか。下がっていいよお」

「御意。……………主上」

「ん？なんだい？」

「……………いつでも……お呼び下さいますよっ」

「……………あ、ああ」

気配は消えたみたいだねえ。

もつとも、居なくなっただとは限らないけど。

ん！。

まだ昼食時を過ぎたくらいかあ。

よし。

冥琳と雪蓮を誘ってお昼にしましようかねえ。

花、咲く時を待ち（1）（後書き）

今回もお読み頂きありがとうございます。今回は中編のその？、といったところです。

その？からヒロインズの登場です。

ヒロインをこのままでいくか、増えてしまつのかはネコヌマにはまだ判りません。

ですが、きっとなんとかかかんとか。となると思います。

では、次回もよろしくお願いします。

花、咲く時を待ち（2）（前書き）

ハフアフ

頑張ります。

花、咲く時を待ち（2）

こんにちは。暁です。

ちよおつと遅くなっただけど、お昼を食べに行きましようねえ。

冥琳と雪蓮を呼びに行かないと。

うん。どちらから行くべきでしょうか。

・

・

……うん。先に場所のわかっているほうに行こう。

冥琳のところ。だね。

じゃ行こ！

冥琳は、と……まあ、十中八九執務室だろうなあ。

あ、やっぱりいた。

「まったく、冥琳、こんなに皺寄せちゃあ駄目だよ」

ああゝあゝまたこんなにして。

「む、暁、か」

「そうだよあゝ。どんな感じ？」

もちろん仕事のことだけどね。

「そうだな、このあたりで一息入れても大丈夫だろう。最近は文官も増えてきたし、な」

「くすつ。俺は冥琳が無理をしなくてもいいのなら何でも大歓迎さ」

「おいおい、雪蓮はどうでもいいなんて言うんじゃあないだろうな」

「雪蓮は言わなくても適度に休むからね。むしろ冥琳は、こんなことでしか心配させてくれないからね。いっぱい心配されなよあ?」
「ああ。そうだな。惚れた男に心配されるというのも悪くない。が、心配させてばかりというのも、な」

いや、ね。冥琳さん。

そんなにはつきりと言われてしまうとさすがに恥ずかしいよ。

「そうだねえ。うん。じゃあ、心配させた罰としてお昼と一緒に、なんてどうかな?」

「ふふつ。そうだな、罰ならば受けなければな。喜んで、というのも変な話だな」

「じゃあ、行こうか」

「そうだな。これから雪蓮を探さなければならぬだろう?」

「ああ」

黙って冥琳の手をとり、歩き出そう。

隣で少し赤くなった顔が見えるけど、ほんの少し見るだけでやめておこう。

だって、こんなときにしか見れない表情なのに、耐性がついたら困るでしょ?

でも、代わりに少しいつもよりゆっくりと歩こう。

左に感じるこの温もりをもう少し感じていたいから。

ああ。そういえば……聞いておくかなあ。

「冥琳は雪蓮がどこにいるか知ってる?」

多分あそこだとは思っただけど……

「多分、戦鈴様のところじゃないか？」
「やっぱり。」

「ん〜。今の時間だと政務だと思うんだけど・・・真面目にして
るかねえ？」

「きつと無理・・・だろうな」

「となると・・・街に出ているだろうな」

でも、祭姉と中庭で酒盛りっていうのもあり得るなあ。

「ふむ。じゃあ、中庭と調練場を見回った後、街に行く、という流
れで行きましょうかあ」

「ふむ。そうするとしよう」

お姫様を連れてお姫様探しっていうのも意外と・・・
まあ、理由が不相応で、逆に面白いかもねえ。

我が姫は一体いずこに？

花、咲く時を待ち（2）（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

「花、咲くを」は3部構成でいくつもりでしたので、次回で日常編？に一区切りです。

これが終わると・・・どうなるかな？

では、次回もよろしくお願いします

花、咲く時を待ち（3）（前書き）

皆様、お久しぶりです。

ネコ又マでございます。

お待ちいただいていた方々。

やっと、投稿です。

では、どうぞ。

花、咲く時を待ち(3)

こんにちは。

暁です。

先ほどから冥琳と一緒に雪蓮を探しているんですが……

・

「見つからんな……」

「ええ。祭姉と一緒にでもなかったですしねえ」

いないんですよえ。

祭姉は案の定中庭で白酒を飲んでたんですけど、肝心の雪蓮がどこにも。

戦鈴様のところにもいなかったですし……ふむ。

一体どこなんでしょうか。

「ねえ、冥琳？」

「ん？ 暁、何か心当たりでも思いでしたか？」

「それが……まったく。冥琳はどうです？ なにかありますか？」

「いや。最近江賊などの類が減ったせいかな、書簡がことのほか増えてな。おかげで中々、な」

冥琳もですか。

確かに戦鈴様が建業を治めるようになって賊は減ました。

けれど、今度はその治安を維持するために多くの政務が俺たち文官に課せられるようになったんですよ。

これは軍師をしている冥琳も例外ではなかったようで……

軍師、と言つても結局は文官。彼女の場合、なつてから日が浅いが故に奔走しているのをよく見かけます。

主にh i g eのせいらしいんですが・・・・・・・・・・

俺自身手伝いたいのはやまやまなんですよ。

でも、何事も経験。ここで手伝つても彼女のためにならないと思い、手は出してません。

自身の仕事量を増やすことでささやかながらの援護はしていますけどね？

そんなこんなで文官畑の俺たちは、最近雪蓮に会う時間がなかったんですよね。

もつとも、雪蓮から会いに来ることはその限りではないのだけど。

どうにも・・・・・・・・・・

会話なんてあまりないからなあ。

ふらつと執務室にきて、ひとしきり寄り添って帰る。って感じだものなあ。

きつと雪蓮なりに気を使ってくれているんでしょうねえ。

雪蓮だつてそんなに暇じゃあないでしょうに・・・

ん？

そういえばこの間来た時に、新しくできた店のチャーシューがどうか・・・

「じゃあ、とりあえずどこで食べるか考えながら探すというのは？
一応気になる店もあるしね」

「ふむ。そうだな。いつまでもここにいたのでは、また執務室に引

きずり込まれないとも限らんしな」

「そうだねえ」

一応行ってみますか。

<雪蓮side>

「んん」。やつぱり暇ねえ。こんなことなら暁と冥琳を誘ってくれば良かったかしら？」

そう口にして、ふ、と考えてみる。

「無理ね」

そうなのよねえ。最近のあの二人、というよりは文官全体だけど。忙しすぎるのよね。

だって、孫家の優秀すぎる文官がいるにも拘らず、本来内政にあまり関わらない冥琳まで内政に駆り出されてるくらいなもの。

そ・れ・に！それによ！

あの暁が朝から夜まで仕事づくなのよ！？

何とか思考っていう程家の反則じみた技能を使ってそれだって言うんだから尋常じゃないわね。

考えてみると呉が出来てから賊の討伐やなんかで内政にかける時間も少なかったのかもしれないわね。

それが今一気にきている、ってことかしら。

・・・・・・はあ。

暁じゃなくてもため息の一つくらいつきたくなるわね。

ここのところ暁と一緒にいる時間もあまり取れないし。

執務中だと、どうにも声かけずらいのよねえ。

別にただ一緒にいるだけでも良いんだけどね。

それでも、一緒に出かけたいし、長々と話していたい時だってある。それに、やっぱり冥琳もいないとやっぱり駄目ね。

「あれ？孫策様、今日もお一人で？周瑜様や程禁様はいらっしゃらないので？」

「そうなのよ。最近ずっと忙しいみたいで嫌になっちゃうわ」

「そうですか。落ち付いたら、また三人で来て下さいね」

「ええ。もちろん行かせてもらうわよ」

私たち三人の関係は変わっている。

一人の男に二人の女が寄り添っている。

ここまでは割によくある話だけど、私たちは普通とは違っている。

普通ならば、男が女を愛していたり女が男を愛していたりで終わる。

でも、私たちは二人とも愛している。

私は冥琳と暁を。冥琳は暁と私を。暁は私と冥琳を。

友愛でも、親愛でもない。

純然で十全な愛。

きつと依存しているのだろう。

それほどまでに三人でいるのが当然で、それほどまでに一緒だったのだから。

王としてはほめられたものではないでしょうけど。

二人が忙しいのはこの国を良くするため。

そんなことは分かっているし、それが次代の王である私のためだということも分かっているつもり。

でも

「いらしゃーい！三名で？」

ん？

「おじさん。私一人よ？」

「後ろのお二人とはご一緒じゃあないんで？」

え？二人？

「暁！冥琳！」

「やっぱりここかぁ」

「ああ。暁の言うとおりだったな」

そこには私の最愛の二人がいた。

「ん？何ぼーつとしてるの？早く注文しよ？」

「そうだぞ雪蓮。そもそもお前が政務をさぼって城にいないからこまで昼が延びたんだぞ！」

「あ、あはははは・・・」

「まったく、いつもお前は・・・」

「まあまあ、冥琳・・・」

「ふふふ」

「「ん??どうした(の)」」

「なんでもないわ。早く注文しましょ?」

二人がいて、私がいて、呉のみんながいる。
こんな日常が続くように私は戦おう。

きつとこれが私が戦う理由だから。

花、咲く時を待ち（3）（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回は雪蓮でした。
デレです。

まあとにかく、次回はまた時間が飛びます。
多分、二年くらいかな。

話的には、結構重要になってくる・・・かもしれません。
では、次回もよろしく願います。

5・花・実となりて、輝きは次代へ（前書き）

皆様こんにちは。

ネコ又マでございます。

今回は、ちょっとした山です。

今回の話が終わると、そろそろ原作に突入・・・となります。

まあ、間に2～3話程度入るかもしれませんが。

長くなりましたが、では、どうぞ。

5・花・実となりて、輝きは次代へ

< 3 s i d e ? >

最近ではよくある戦だった。

他国が攻め入り、それを撃退する。

いろいろと今後考えなければいけないことも多くあると文官の方々は言うが、今できることはそれくらいではないのだろうか。

それで万事うまくいくはずだ。

そもそも、何故それほどまでに呉に他国が攻めてきているのかという。

どうも、孫堅様が気に食わないらしい。

何でも、「賊討伐で成り上がったようなものが国を維持できるものか。それならば、より相応しいものへ寄越すのが当然ではないか」という理屈だと言う。

偉い人間の考えていることなど我々一将兵には理解できん。

そう考えていただろう。

孫楽様が殺されるまでは……………

一年ほど前のことだ。

もう日も落ちようというときに、荊州から旅芸人の一座が来たという噂を聞きつけた孫楽様が、程普様を伴ってそれを見に行こうとしていた。

孫楽様と言えば孫堅様の夫であり、呉にとっての重要人物だ。

一緒に居られる程普様も筆頭文官として呉になくはならないお方。そんな二人が供も着けずに公演を見に行くなど危険極まりない！！そう考えた私は、お二人に許可をもらい、護衛として一緒にさせて戴くことになった。

途中、程普様のご子息の程禁殿も共に行かれるとのことに加わり一路会場まで向かうことになった。

護衛対象が増えることへの不安もあったのだが、程禁殿の噂を思い出しいらぬ世話かと考えを胸に仕舞った。

思えばこれが間違いたったのかもしれない。

建業では旅芸人の一座が芸を披露する場所が決められており、探す手間無くすぐに到着することができた。

公演自体も非常に手の込んだものであり、孫楽様達も非常に満足されたようだ。

しかし程禁殿はどこか納得のいかない表情をされており、どこか落ち着かないように見えた。

公演が終わり、城へと引き返そう、というところで事は起こった。いや、始まったのかも知れない。

ふいに目の前で程普様と談笑していた孫樂様が倒れていく。
ドサツという音とともに我に帰った私は周辺を警戒するとともに、
城へ連絡を頼む。

すぐに事態を知った黄蓋様達が駆けつけ、孫樂様達は城へと運ばれて行った。

私は場の収集に当たるよう命じられた。

それから、しばし付近の警戒を続けていたが、何かを引きずるような物音に振り向くと、何かを引きずってきたであろう程禁殿がいた。

それからのはあまり詳しくない。

私はあの後程禁殿に戻るよう言われ、詰所へと戻った。

翌日、全住民に孫樂様が暗殺されたことが伝えられた。

賊はあ的一座だという。

話によると、あ的一座は荊州の劉表から送られた刺客なのだという。

あの時、私は護衛の任を果たすことができなかった。

そして、その私に孫堅様が与えられた罰は

「戦場で一人でも多くの劉表の兵を殺すこと」

それ以来私の生活の場は戦場になった。

幸いなことに私は天涯孤独の身。家族といえるものはこの呉に住む

人々のみ。

そして今日、劉表との戦いで我々は優勢に戦いを進めていた。孫堅様が少々深追いしすぎているような気がするが、夫の敵ということでのその気持ちは十二分に理解できる。

時期王である孫策様も同じ気持ちのようで、今日はいつにもまして鬼気迫る勢いだ。

かくいう私も罰を全うしなければならない。

む、孫堅様が突出しすぎている。

追わねば。

あの時のようなことは二度と起こしてはならないのだから……

……

それにしてもこの引き際……！！！！まさか、伏兵！！！！？？

「つつ！！！！」

弓兵を伏せていただと！？

くつつこのままでは！！！！！！

「孫堅様！！！！！！」

目の前に迫る無数の光。

次々と体の感覚がなくなっていく。

光、熱、無。

ああ。もう……光すら見えない。

後ろに突き飛ばした孫堅様は・・・お怒りで・・・はないだろうか？
孫・・・楽様、私は・・・・・・・・あなた・・・・の奥方を・・・守れ・・・
たで・・・・・・・・しょ・・・うか？

< 3 s i d e ? e n d >

戦場から戦鈴様が出し、溪谷の方へ向われたと聞いた俺たちは馬を駆り後を追っています。

溪谷まであと少し、というところで周囲に響き渡る轟音。
いやな予感がしますね。

限界まで走らせていた馬をさらに酷使し、
溪谷についた俺たちが見たのは最悪の光景でした。
周囲の三分の一を埋め尽くす岩の群れ。
岩のない場所には一面に尽きたたる矢。

そして・・・・・・・・胸から下は岩に押しつぶされ息絶えた戦鈴様・・・
・・・・・・・・

「そんな・・・そんなあ・・・母様・・・・母様あ—————」
「—————！！！！！！！！！！」

「うつ・・・うつ・・・・堅殿・・・・・・・・」

泣き叫ぶ彼女たち。
うなだれる兵。

戦鈴様。

あなたが望んだ天下は、俺にはこんなにも不自由に見えます。

見上げた空はあまりにも閉ざされていました。

5・花・実となりて、輝きは次代へ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ネコヌマでございます。

今回暗めのお話でしたがいかがだったでしょうか。

今回は三人称、というか、ある兵士の独白のような形で進めてみました。

副題は「ある忠臣の悲劇」です。

いろいろと葛藤はあったんですが、自分の中で孫堅の死、というのは孫策、基呉の原動力の一つになっているのではないかと考えたのでこの形にしてみました。

主人公の活躍がなかったのはスルーで。

今回は少し時間が飛ぶか、後日談かどちらにしようか検討中です。どちらにしろ、近いうちに投稿しますのでしばしお待ちください。

では、次回もよろしく願います。

6・きつとこれから始まる物語（前書き）

皆様こんにちは。

ネコ又マでござりまする。

もうひとつの方書き始めてから妙なテンションになり、キーボードが止まりません。

助けて！CCC

というわけで、始まります。

6・きつとこれから始まる物語

< 3 s i d e >

孫文台死す。

その報せは雷鳴の如く大陸全土に広まっていた。

そもそも、愚帝の下混乱の様相を見せ始めた漢において、孫文台のように義勇軍から成り上がった人物は良くも悪くも注目の的であったのだ。

そんな人物のもとには少なからず他国も細作を放っており、要の抜けた呉の今後に注目が集まっていた。

もつとも、他国が注目していた理由は、どこが呉の土地を手に入れるか、という一点であったが。

そんな中で呉を手に入れたのは、名門袁家の直系である袁術であった。

それは、孫文台の死より一月後のことであった。

「姉様っ！！どういうこと！！？？なぜ袁術になど降らなければならぬのよっ！！」

袁術に降る。

そのことに納得できないものは呉内部にもいる。

むしろ、袁術に降る、ということよりも劉表に攻め入らないのかとするものが多数を占めていた。

他国の者ですらそれは当然行われるであろうと考えていたし、呉を手に入れるのはそのあとの疲弊した瞬間であろうとするのが多数であった。

しかし、そんな中での全面降伏。

これには呉を狙っていた他国も驚きとともに唇を嚙まざるを得なかった。

かつて四公を輩出し、今なお大陸で一大勢力を誇る袁家。

それも、直系の袁術に降るとなると簡単に手を出すわけにはいかなくなる。

そもそも戦いの末の降伏ではなく、孫家から申し出た降伏であるのだ。

つまり、すぐにでも攻め入った場合、袁家の兵士だけでなく無傷で残った孫家の兵士とも戦わなければいけないことになる。

それは避けなければいけない事態である。

また、万が一攻め入るとなれば自軍にも相当の被害が出る。

その間他国の侵略がないとは限らないのだ。

これら諸侯の思惑がそうさくする中、内心で安堵している人物が二人いた。

程禁と周瑜である。

もともと、袁術からの降伏勧告に真っ先に賛成したのがこの二人な

のだ。

袁術より降伏勧告が突き付けられたさいに二人の頭にあったのは、今後どのように呉を存続させるか、の一つであった。

確かに、自分たちが納めてきた場所を失うのはつらい。

しかし、今の状況ではどの様に足掻こうとも近いうちに他国に滅ぼされてしまうのは目に見えている。

そんなときに袁術よりの勧告。

これは、渡りに船といえた。

袁術といえば、世に知られた名門袁家の直系。

さらに、未だ幼く暗愚として知られている。

ならば袁術に隠れ蓑になつてもらおう。

と。

しかし、まだ幼く母親を殺された恨みも悲しみも抜けきっていない孫権にはこの状況は首を縦に振れるようなものではなかった。

初期から孫堅に仕えてきた黄蓋にしたところでどこか納得のいかな表情をしている。

「姉様！！やっぱり納得なんてできないわよ！！」

「そうじゃのう・・・わしも些か承服しかねますぞ？」

やはり、納得していないようだ。

二人は怒気を隠そうともせず、孫策、並びに後ろに控える軍師二人に目をやる。

一人は周瑜、もう一人は孫堅の死後新たに軍師となつた程禁である。

二人に視線を向けられ、周瑜は何かをこらえているようだが、おもむろに口を開こうとする。

そのとき、それを制し程禁が口を開く。

「孫権様、黄蓋殿、今は雌伏の時、そう思ってはいただけないでしょうか？今のまま闇雲に戦っては幾ら孫呉の精強な兵といえども、いずれ滅ぼされるのは明白。ならば、数年の屈辱に耐え、先の百年二百年を得るために力を蓄えましょう。故に、今は矛をお収め下さい」

「ふむ。程禁よ、その言葉に偽りはあるまいな？」

「是」

「して、数年と申したが、伏せたまま地に帰るなどありはすまいな？」

「是。知つての通り現在帝位についておられる霊帝は暗愚にして、宦官の増長はますます激しい有様。太子にしたところで、未だ稚児も稚児。体調を崩しがちな帝のことを鑑みるに、具体的に言うならば、長くてあと六年程で戦になるかと」

「そうならねばどうする気じゃ？」

「それをどうにかするのが我々軍師なれば、と思考しますが？」

神妙に答える程禁に、途中から黄蓋は面白そうに尋ねる。

孫権は先ほどの様子が嘘のようにポカンと口をあけ呆けた様に二人の様子を見ていた。

が、ハツとして口を開く。

「に、兄様！？」

「何でしょうか、孫権様？まだご納得いただけなかったのでしょうか？ならば「もういいわ！！もうわかったから！！！！」そうですか・・・それは重畳」

「くつくくく・・・」

「祭も！！！納得したんだったら、兄様をもどすの手伝つてよ！！」

「んん？蓮華、どうかしたんですかあ？戦でもないのに声を張り上げるなんてはしたないですよ？ねえ？祭姉？」

「うむうむ。暁坊の言う通りじゃ、堅殿が見たらさぞお嘆きなさるじやろつて」

「~~~~~！！！！」

「ああ。戦鈴様。お許し下さい。私の教育が足らなかったばかりに・・・ヨヨヨ・・・」

「~~~~~！！！！兄様！祭！」

ふげけあっている三人には先ほどのぎすぎすとした雰囲気が取れていた。

孫権に至っては母親の名前が出ているにも拘らず自然に振る舞えるようになっていた。

彼女はわからないかもしれないが、今回の降伏の件はすでに皆も承知していた話であった。

確かに、難色を示す者もいたが先を見据えて考えれば自ずと理解していくもの。

一番難色を示すかに思われた黄蓋ですら比較的早い段階で賛成を示していたのだった。

そんな中で最後に立ちはだかったのが孫権だったわけである。

理で説いても感情が反発するだろう。

感情に訴えても素直には応じないだろう。

ならば、第三者として情報を得させてはどうか、というのが周瑜と程禁の考えた策であった。

後の歴史に残るかどうかはわからないことだが、これが軍師になってから初めての共同作戦であったことはあまり知られていない。

この時、程禁17歳。

乱世は徐々に近づいていた。

- - - - - 閑話休題 - - - - -

さて、程禁が黄蓋と激論？しているとき、王と軍師は何をしていたのだろうか？

「ねえねえ！？冥琳！？」

「ええ。雪蓮」

「あの表情良い！！！！！！！！」

「やっぱり！！！？そうよね！？暁つてば普段微笑んでることが多いから、あんな表情滅多に見れないのよねえ」

「そうね。執務中もあそこまで真剣な顔じゃないものねえ・・・ああ。絵師でも呼んだ方がいいのかしら！？」

「「つつつ！！！！！！！！！！」」

「冥琳・・・・・・・・」

「すまない・・・・雪蓮」

「気づくのが遅すぎ（た）（よ）！！！！！！！！！！」

この二人には国の転機よりも大事なものがあるのだろう・・・・

6・きつとこれから始まる物語（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマ参上。でございます。

今回で、原作前のお話は終了です。

原作までの四年間は時々閑話、という形で書くつもりでいますので
そちらもご期待くだされば幸いです。

基本、本編微糖！の精神で書いているつもりなので、たまに閑話で
糖分を補充。

さて、内容の話に戻りますが、次回より原作突入です。

御遣い殿は原作準拠の形で書いていく予定でいます。

外れすぎた場合はネコヌマの嫉妬パワーが増えすぎた、と思っ
てください。

武将の所属なんかも準拠で行くつもりですが、原作をプレイした感
じで違和感のあった武将は動かすかもです。

ネコヌマはメインヒロインの二人はもちろんのこと、文遠さんとか、
星さんとか好きなんです、文遠さんの移動はありません。

星さんは大陸漫遊の際にどうなるか、といったところです。

長くなりましたが、次回まで構想を練ってみてアンバランスになら
ないようにしたいと思います。

では、次回もよろしく願います。

7・廻りだす世界（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマにございます。

最近、『悪魔』の方がペース速めなことに気がつき、急いで更新です。

サブタイトルで分かるかもしれませんが今回より、ようやく、ようやく原作に突入です。

ながかったー。

では、いきまーす。

7・廻りだす世界

<side 冥琳>

暁が蓮華様に一芝居した日から、すぐに我々孫家の将は袁術の持つ領地に分散させられた。

そんな中、私と暁は二人奔走し、雪蓮を袁術の客将という一応の地位につけることに成功していた。

この地位に何ら決定力のようなものはないが、兵を鍛えるにもこのような地位がなければ不可能なのだ。

さて、我々孫家の将は分散されることになったのだが、それ自体に私は文句はなかった。

しかし、どこからか暁の優秀さを聞き及んでいた張勳が、袁術の城で文官をやれと言い出したのだ。

こればかりは私たちにも認めることなどではしなかった。

だが、彼らが優秀な文官を求めていることも事実。

ならば、どうやって暁を守ればいいのか。

私と雪蓮は目線で十分ほど会話をし、その後脳内で『第374回』

暁はなぜあんなにも我々を引き付けるのか”会議』を行い、天啓を得た。

周公瑾、生涯最高の策、と言ってもいいだろう。

h i g eを差し出せばいいのだ。

そして私は目の前にいる悪鬼共に必殺の一撃を見舞うことにした。

「なるほど。つまり張勳殿は程禁の能力が必要だと、そう言いたいわけですか」

「いえいえ、実際そうなんですよ。最近、領地が増えちゃったじゃないですか。だから、優秀な文官もほしいなあ、なんて。ね、お嬢様？」

「うむうむ、優秀な文官はほしいのじゃ。じゃが、一番優秀なのを取っては孫策たちがかわいそうじゃからな、二番目で勘弁してやるのじゃ」

「さつすが美羽様あ。よ、小悪党。恩着せがましさ大陸一い」

「うむうむ。七乃よ、もっと褒めてたも」

くつくつく。やはりそうか。

「（冥琳。大丈夫なの？）」

「（ああ。雪蓮、私に任せておけ）」

「ふむ。では、一番優秀な文官を用意せねばなりませんな」

「ええそうね。そうでないと失礼よねえ」

「え、え」と。別に一番じゃなくてもいいんですよ？」

「う、うむ無理ならよいのじゃ」

「いえ、そういうわけにはまいりません。ここは孫家の筆頭文官程普殿を入城させましょう。まさか孫家一の文官を拒みなどしないでしょう？」

「え、えっとあ。お嬢様？（どうしましうお嬢様？）」

「わ、わらわは一番でもよいと思うぞ・・・（無理じゃ。これ以上は無理なのじゃあ！！）」

「そうですか。ならば、すぐにも程普殿をこちらへ寄越すことにしましょう」

「わかったわ。じゃあ袁術ちゃん、そう言うことで私たちは失礼す

るわね。程普は明日にでも来ると思っから。じゃね」

雪蓮がそう言うと同時に私は身をひるがえし、部屋を出た。

その後、私たちは一言も話すことなく自分たちの居城に戻った。

そう。だって、会話などなくとも互いの考えていることは理解していたから

「（計画どおり）」

私はこの時ほど軍師としての自分に感謝したことはないだろう。

『最小の被害（h i g e）で最大の効果（暁との時間）を』

ああ！！

視える。見えるよ暁。

私にも真理が見える！！！！

< s i d e 冥琳 o u t >

そんなこんなで、袁術のもとに来てからもう四年。

初めてのころは袁術のところまで文官に、という話もあったようですがやはり父上が行くことになりました。

まあ、孫家の筆頭文官である父上が行くのなら私が行く必要はありませんからね。

その時、冥琳と雪蓮がスゴクいいエガオだったのは言うまでもありません。

しかし、冥琳はわかるんですが、雪蓮まであんな顔をするとは・・・

ま、まあ。私自身彼女たちと離れるのは嫌ですし、うん。
きつと高度な政治的理由＋私情でしょうね。

何故か九割がた私情の気がするのは気のせいでしょうね。
きつと。

そんなこともありましたが、それ以外ではこの四年間は静かな日々
だったと明言しておきましょう。

たまに袁術から目茶苦茶な注文があつたりしましたけど。

ふふ・・五百の賊相手に百の兵で討伐に行け、とか。

蜂蜜買ってこいとか。

蜂蜜買ってこいとか・・・・・

あー、あれですね。

ここから出たら絶対に袁術は殺しましょう。

こどものやることと、最初は目をつぶってたんですけどね。

途中から頭のいいガキだってわかってきましたから、もう見逃しま
せんよ。

袁術ももう十四ですよ？

いくらあんなに甘やかされてるからって、多少の分別はありそうな
ものです。

まあ、殺すのはもう確定。

もしくは財産没収のうえで川にでも流してみますか？

それも良いかもしれませんねえ。

おっと、話がずれましたね。

まあ、四年で言う名は意外に長いですからねえ。うんうん。
私自身は政務に励んだり、鍛錬に連れ出されたり、夜は夜でいろいろあったり……

基本そんな感じの日常を満喫していました。
あれですよ？

黒子の位置とか覚えるのって素敵じゃないですか。

つと。

そんなのんびりとしつつ、面倒事がたまにあるような日々を過ごしていた私たちでしたが、最近妙な噂を耳にしました。

なんでも、都の管路という占い師の占らしいのですが、聞いたところでは『天より舞い降りし光り輝く衣纏いし御遣い、乱れし世を終焉へと導き世に安寧をもたらさん』というものだそうです。

うん。

言わなくてもいいですよ。

あからさまに胡散臭いですよね。

まあ、いくつか思い当ることはあるんですけどね。

例えば、私のような存在で、尚且つ三国志に詳しい人物だとか。ですが、今生に至るまでの記憶で私と同じような人物がいた記憶はありませんから、私と同じような存在という線は薄いでしょう。

大穴で未来人というのもありでしょうか。

確か、二十三世紀には試験段階までいった時間逆行装置があったように覚えていますが。

まずそれはありえないでしょうね。

これは生活してみte思ったのですが、この世界には時代にそぐわないものが多すぎる。

歯車であつたり、メガネであつたり、と。

それらから考えられるのはここが並行世界であるということです。

そして、時間逆行装置では並行世界の移動はできないはずですから。

そういえば、かつて飼い猫だった時に飼い主が言っていたことがありましたね、『世界とは隣り合った面である』とか何とか。であるとするならば、私が持つ記憶は日常に生かせるもの以外未来にないものかもしれない、ということですね。

そう考えると、逆行の線も完全に否定はできませんね。

もしも、万が一億が一、天の御遣いなる人物があらわれた場合。そしてその人物が未来人だったとしたら………

どこにも属さず民衆を導くくらいなら良いでしょう。何もしませんよ。

けれど、もし呉に牙をむくようであれば……

「虎」

「は！ここに」

「天の御遣いというものを知っていますか？」

「世に安寧をもたらす、と言つ占いのことであれば」

「あなたはどお思いますか？」

「私には主上、一万歩譲って呉の未来しか興味がありませんので何とも。と言いたところですが、一言だけ邪魔、と」

「邪魔、ですか……」

「は！僭越ながら、我等”黒”一同は髪的一本、血の一滴すら主上のものと自負しております。そんな中現れるかもしれない不確定要素は、呉にとつて障害になるやもしれません。故に邪魔、と申し上げました」

そこまで理解していますか……

流石、私の直属部隊。なんて言ったら自惚れが過ぎますかね。それにしても、確かに邪魔ですねえ。

しかし動向を知らなければ手も打てませんし……

「では虎。御遣いの探索を命じる。発見後、行方を確認次第帰還せよ。なお、危害を加えることは禁ずる」

「は……」

「以上だ。くれぐれも慎重に行動せよ」

「では……」

行きましたか。

彼女は優秀なんですが、時々雪蓮や冥琳と同じ目をしてドキッとするんですよね。

なんて言うか、目から光が消えたような……

それは置いておいて、これからどうするのかを考えないといけませんねえ。

目下の重要事項は、最近増加しつつある賊への対処法ですね。

彼らは、多い時には数千を超えることもあるから気をつけなければいけないのですが、どうも一つの集団のように感じることがあるんですよ。

やはり、あの黄色い布が共通点なのでしょうね。

しかし、それ以外には特に今のところ目立ったものはなし。

強いて挙げるならば、彼らがもともと農民だった、ということでしょうかね。

それだけならば良いのですが……

< 3 s i d e >

程禁がうんうん唸っていると、何やら中庭で声が聞こえた。

どうやら、程禁を呼んでいるらしい。

考えを中断した程禁が中庭へ向かうと、ほかの将はほとんど揃っているようだ。

「晁。遅いわよ」

「そうじゃぞ晁坊。あまりに遅いので迎えに行こうかと思ったぞ？」

孫家の面々が軍議を行うのはこの中庭である。

それは、度々送られてくる袁術の細作がうつとおしいという理由からだ。

こうすることで、自分たちには隠すことなどない、と暗に主張しているのである。

「はは……ごめんごめん。少し考えたいことがあってね」

「そう……ならいいわ。じゃあ始めましょうか。穩」

「はいはい。えつとですね、さつき袁術さんのところから使いが来まして、賊の討伐に行つてこいだそうです」

「へえ。数は？」

「大体、千といったところかと」

「いいわ！！祭準備して！！でき次第行くわよ」

「あいわかった」

「じゃ、暁、行ってくるわね」

「ええ。雪蓮も気をつけて」

そ、と孫策が程禁に寄り添う。
が

「策殿！！」

「もー！！祭つたら。じゃね。暁。すぐ戻ってくるから」

と言うとあつという間にいなくなってしまった。

二人のいったであろう方向を見ながら、いつもならいる筈の人物がいないことに気づいた暁は穩に尋ねてみる。

「そつえば、冥琳は？」

「えつと冥琳様でした」ここにいるぞ「うう」

と同時に頭を抱きしめられる程禁。

「どこに行つてたんですか？冥琳」

「なあーに、どうせ討伐に行くのは解りきつたことだったからな。ならば、兵糧の準備でもしていた方がいいと思つてな」

「それもそうですな」

と頷き、周瑜の手を握る。

二人は気付いていないようだが、傍らでは陸遜が何やらもじもじと熱のこもった目で二人を見ていた。

「ねえ冥琳。そろそろだと思いませんか？」

「ああ。そろそろ閨に行こうか」

「それも良いですが、まずは汗を流してからですね。でも、今は違う話ですよ」

「ふっ。わかっているさ。そろそろ大きい戦が始まるかもしれない、と言っただろ？」

「ええ。そのとおりです」

「えっと、晁さんは大きな戦が始まるかもしれないって言っんですか？」

「その通りですよ。穏」

「ああ。それも、国が揺らぐほどのな」

ところどころおかしい会話が入っていたが、呉の二大軍師はこの後に起こるであろう乱世について考えを馳せていた。

最も見た目にはバカップルにしか見えないが……

孫家は今日も平和だった。

< 3 s i d e o u t >

7・廻りだす世界（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ネコヌマンです。

只今作業用BGMと同時に送っております。
おねえちゃんに任せたい今日この頃でございます。

さて、次回は黄巾党討伐編に突入するかと思います。

では、次回もよろしく願います。

8・黄巾は夜明けを告げ（前書き）

皆様こんにちは。

ネコ又マでございます。

最近自分には褐色スキーな面があるのでは？と思い始めた今日この頃です。

まさか・・・

で、では、始まります。

8・黄巾は夜明けを告げ

<side 冥琳>

「愛してるんだ！何故それがわかってくれないんだ！？」

「・・・」

「私の気持ちは分かっているはずでしょう！？どうしてそんなことを！！」

な、何が起こっているというんだ。

そんなことよりも、だ！！！

いいいい、今の声は暁！

まさか雪蓮と喧嘩でもしたのだろうか？

いや、まてまて。

雪蓮なら街に警邏に出たばかりじゃないか！

そもそも、私自身が見送りをして、その足で今ここにいるというのに！！！！！！

落ち着け落ち着くんだ私！！

暁の好物は、甘味だな。

うむ。

そう言えば、最近新しくできた饅頭屋のゴマ団子が、とてもおいしいと評判らしい。

今度買ってくるのもいいかもしれんな。

むしろ、一緒に買いに行く方がいいのかも知れん。

しかし、現状でそれだけの暇が取れるだろうか。

袁術の下にきて以来、我々の仕事は増える一方だ。

私は少し増えた程度だが、暁などその比ではあるまい。

暁はここにきて以来、ともに休みなど存在していないのだから。

その原因が、あのh i g eにあるというのだから腹立たしいことこの上ない。

袁術の城に暁の身代わりに行き、漸く我々の役に立ったというのに・
・・・・

何が「私の息子は私の比ではないほど仕事が早い」だ。

言っていることは、間違いが一つもないほど真つ当だと言うのに、
言った相手が誰なのか考えることも出来ないほど、判断能力がh i
g eに吸い取られているのだろう。

全く、せつかくの貢献をすぐに食いつぶしてしまうとは・・・これ
だから、あのh i g eは・・・

暁をこの世に誕生させることに貢献した、ということと、暁の父親
でさえなければ直ぐにでも始末するものを。

勿論、義母上は別だ。

これは、私と雪蓮の合同見解でもある。

あの方はいくつになっても変わらない。

まるで、仙人か何かのようだ、と思った私は悪くないと思う。

きつと暁の良いところは、全てあの方のおかげなのだろう。

それに、あの小動物然とした雰囲気の方を悪く言えるようなものがあるだろうか、いやないだろう。

そう言えば、先日お会いした際に、早く孫がみたいと言っておられたな。

勿論h i g eが居ない時にだが。

うゝむ。

子どもと言つのはなあ。

中々に出来づらい者もいる、という話を聞いたことはあつたが、まさか自分たちがそうだったとは思ひもしなかつたな。

子どもができれば暁も喜んでくれるだろうし。

フッフッフッフッフ

はっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ついつい思考に沈みすぎていた……

流石暁。

いつも私に新しい道を示してくれる。

と、今はそんな場合ではないな。

「暁!!」

私が部屋に入ると、案の定雪蓮はいなかった。

部屋にいたのは、暁と……………

「穩!？」

穩だった。

まさか、先ほど聞こえたのは……………

いや、暁に限ってそんなことはない!

私と雪蓮と言うものがありながら穩まで……………

いや、きつと違う。

きつとキキマチガイダ

「・琳!冥琳!」

「!!!はっ!!!」

どうやらあまりの事態に気が遠のいていたようだ。

「どうした暁？」

「いや……まあいいでしょう。それで、どうしたんですか？」

「そうですね。急に黙っちゃうんですから、心配しましたよ。」

「う、うむ。通りがかったところ、こちらから声が聞こえたのでな。それで見に来たんだ」

「そうですね。じゃあ、丁度いいので冥琳にも聞いてもらいましょ
う」

「そうですね。その方が、確実性が上がると思います」

「ん?なんのことだ？」

ふ。

どうやら取り越し苦労のようだな。

そもそも、暁が私と雪蓮以外の女を必要とするとは思えん。

そうだ、そうだとも！

たとえば、黒の連中の目が怪しかろうと、一年ほど前に現れた槍使いの目が怪しかろうともだっ！！！！

あれ？

暁って倍率高くないか？

「冥琳、あのですね。雪蓮って突撃癖があるじゃないですか」

「ん？あ、ああそうだな・・・あればかりはどうにかしなければな」

「そうですね。だからどうやったら雪蓮様を止められるか話してたんですよ」

「それで、私が愛をこめて説得する、と言う流れになったんですよ」

な、なるほど・・・

穏、成長したわね。

その策は、確かに有効かもしれないわね。

でも！でもよ！？

あまいわ。

その策の最大の弱点を考えていないようね・・・

「穏、確かにその策は有効かもしれない」

「ですよ」

「しかし！！あなたはその策の最大弱点を見逃している！！！！！！！！！！」

「ひっ！！じゃ、弱点ですか？」

その様子では考えていなかったよね。

暁はそもそも考える必要もないことだものね。

普段であれば！

「そう！確かに、その策を使えば雪蓮は止まるでしょう。普段ならば――！だが、戦場において、最高潮に興奮しきつた雪蓮は止まらない可能性もある。そして、もしも止まらなかった場合……」

「場合？」

「暁が悲しむことになる！！」

「え？？」

「でしょうね」

「そして戦が終わって、そんな暁を見て、雪蓮は落ち込むだろう」

「はあ」

「うんうん」

「そして、そんな二人を見れば私も悲しい。つまり、この策が失敗すると雪蓮と、私、暁の三人がしばらく使い物にならなくなるということだ」

おそらく、一週間は部屋から出ないだろうな。

三人で。

むしろ、この策を使い失敗した方がいいのではないだろうか。

むむむ。

魅力的すぎて困る。

「そ、それは困りますね」

「むしろ必然かもしれないねえ」

やはり暁は解っているな。

というよりも、自分がそうなるのが必然、と思っているところに愛情を感じてしまう。

おっと、いかんいかん。

「と言うわけだ、穩。その策は使用しない方がいいだろう」

「わかりました」

「私もかまいません。むしろ、ギリギリまでその策は忘れていたいですね」

「ふむ、ならば私から一つ。例の賊の集団のことだが、ここ数週間ほどで、特に大きい一団が発見されるようになったらしい」

「となると、賊騒ぎもそろそろ終わりですかねえ」

「そうですね。今までの感じからすると、本隊は十万は超えるんじゃないですか」

「そう、穩の言う通りよ。ここ最近現われている賊は、数自体は数千程だけど、それが各国でほぼ同時に動き出したことから、その規模は侮るべきではないわね」

「ですね」

「となると、もう少しで本隊とやり合うことになるかもしれませんね」

その可能性は大いにありうるな。

袁術のことを考えると、きっと我々が戦法を任されることになるのだらう。

ともすれば、それを利用して孫家の集結も可能かもしれん。そうするとしばらくは大人しくしていた方がいいのかもしれない。

「とにかく、今は静観の構えを見せた方がいいだろう。私の考え道理ならば、もう少しは袁術に従うふりをしていた方がいいだろうからな」

「はい」

「ええ。私もそれでいいと思いますよ」

とりあえず賊に関してはこんなところだろうな。ほかには今のところ問題にすべき様なものはなかったはずだ。

「少しいいでしょうか？」

「ああ。構わないが、どうした？ほかに何かあったようには思えなかったのだが」

「まあ、なんと云うか時流にそった話なんですがね。天の御遣いについてです」

「あゝあの管路さんの占いですか」

「ええ、そう通りです。その御遣いについてですが、気になったので個人的に調べさせていました。その結果が今朝がた届きましたので、お知らせしようかと」

「それで、どうだったんだ？」

「御遣い殿は実在します。なんでも、二週間ほど前に五台山に流星とともに現れたそうです。その後、劉備と言う人物とともに公孫賛のもとに身を寄せた、とか」

「そうか。それで暁はどう考えているんだ？」

「私ですか・・・どうでもいいですね。今のところ何もしていないようなので。第一どうこう出来る問題でもないですから」

「そうですね。万が一暗殺なんてしたら、その劉備さんのもとに人を集める口実をあたえるようなものですしね」

「穩の言つ通りだな。どうなるにせよ、こちらでも静観と言つことか」

しかし、暁がわざわざ調べていたところが引つ掛かる。

おそらくは黒を使ったのだろうが、それだけ重要なことだと暁は考えているということか？

高々天の御遣い程度に何ができるといふのだろうか。

そんなものよりも、暁を御遣いにした方が良いのではないか。

「では、二人とも今日の話し合いはこのあたりにしておこう。各自仕事に戻るように」

二人とも執務室に戻るようだな。

なんにせよ、気になることは聞いてみなければわからないか。

まあいい。

後で雪蓮と一緒に聞でも尋ねればいいことだ。

うん。

今日は散々心配させられたのだから、いつもよりも……ふふふふ

< s i d e 冥琳 o u t >

あれ？

なんだか唐突に今日は精のつくものを食べなければいけない予感が
！？

レバニラでいいですかね・・・

8・黄巾は夜明けを告げ（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ネコヌマです。

今回は冥琳様の主観でお送りいたしました。
まあ、あまり進みませんでした。現在の黄巾党とか、本隊戦が近いとか、御遣いはどうしてるとか、そんなのを感じ取っていただければ幸いです。

冥琳様を書いていて止まりませんでした。

これからどうしょ。

今回は、閑話的なものを一つ挿んで黄巾党本隊との開戦手前までのよていです。

つまり、後二話で黄巾党戦てことです。

閑話は公孫賛sideの話を用意しています。

では、次回もよろしく願います。

閑話・桃の木の下で・（前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマでございます。

予告通り閑話です。

タイトルで分かると思いますが、劉備たちの回です。
では、どうぞ。

閑話 - 桃の木の下で -

< 3 s i d e >

居城にて、程禁が黒を動かしてほどなく五台山の麓に流星が落ちた、と言う噂があつた。

人々は管路の占いになぞらえ、天の御遣いが現れたのだと口々に噂し、その噂は徐々に広まっていくのであつた。

その噂の人物はと言うと・・・・・・・・

現在、公孫賛の居城にて、謁見の間にいた。

この公孫賛と言う人物、実のところかなりの傑物である。

軍務や内政、つまり知力に秀で、尚且つ、個人の武もそこいらの武将では敵う者がいないほどである。

もつとも、知力においては超一流の文官に勝てず、武に措いても存在だけで兵を鼓舞できるほどではない。

これでは、器用貧乏と言われても仕方がないように見える。

ここで、曹操と言う人物を思い出してほしい。

彼女もまた、知力に秀で、武に秀でた人物である。

しかし彼女は器用貧乏と呼ばれたことがない。

むしろ、非常に優れた人物である。

彼女を傑物せしめているものは、幼少より積み上げた知力である。

その証拠として、孫子を再編したことは耳に新しいことだろう。

元の才によることも大きいのだろうが、それこそが曹操が傑物と言

われる所以なのである。

だが、公孫賛は努力を怠ったのかと言うとそうではない。彼女は幼少時よりその才覚の片鱗を見せていた。しかし、ここで運命は彼女と曹操に決定的な差を与える。

公孫賛は地方豪族の妾の子として疎まれて育った。

逆に曹操は太守の子として生まれ、宦官の祖父より様々な知識を覚える機会を与えられた。

つまり、開始地点がまるで違うのである。

それでも、公孫賛は十二の頃、叔父によって蘆植と言う人物の私塾に行き、今の知力を得ることができた。

もし彼女と曹操の立場が逆であつたなら、どれほどの傑物になつていたのだろうか。

さて、話は戻り、今公孫賛の目の前には劉備たち一行がいる。

百人を超す義勇兵を連れてきたと言うが、ほとんどは役にも立たない擬兵だろうことに彼女は気付いていた。

目の前にいる劉備は、同門の内でも特に師に目をかけられていた人物だった。

しかし、そんな彼女も最近ではトンと噂にも上らない。

これはどこか各地に留まるということをせずに、放浪しているのだらうと公孫賛は中りをつけていた。

そんな人物が百とはいえ兵を率いていたというのだ。

始めは、義勇兵を募ったのかと思い、喜んだのだが、彼らの様子や

装備を聞き、擬兵であると看破したのだった。

「桃香〱ひつさしぶりだなあ〱。元気だったか〱!?」

「うん。白蓮ちゃんも元気そうでよかったよ〱。こんなに偉くなっちゃってて吃驚したよ」

「そんな〱。まだまだだよ。それで?世間話しに来たわけじゃないんだろ?」

「うん〱〱〱。まずはみんなを紹介するね」

と言うと、劉備の後ろにつき従っていた人物がそれぞれ名乗りで始める。

現在ここにはいないが、もう二人軍師がいるのだという。

軍師がここに居ないのはどういうことか、とも思う公孫賛だが、何か理由があるのだろうと思い、呑み込むことにした。

最後の一人が終わったところで、本題に入るようだからである。

「それでね、私たちも白蓮ちゃんの役に立てないかなって思っ

「そうか〱。いや、ありがたいよ。今は賊も多くて、猫の手も借りたいくらい人手が足りないんだよ。で、何人連れてきてくれたんだ?外にいるような擬兵じゃない奴らは?」

「うつ!〱!ばれてたんだ〱〱〱」

「桃香。誠意には誠意を。今回は私だったからここまで通したけど、他の奴はそうとは限らないんだぞ?しっかりしなよな〱〱〱〱」

「ごめんね〱」

公孫賛の指摘に劉備は怯んでいる。

同時に罪悪感が見て取れることから、これは彼女の仕業ではないようだ。

ここで、先ほどの紹介時に代表だと言っていた男が前に出た。

「桃香は悪くないんだ。この策を提案したのは俺なんだよ。すまなかった」

「うっん。ご主人様は悪くないよ！だって私たちのために思ってたことなんでしょ？」

「ああ。でも・・・」

「わかったわかった！！もういいから！！・・・で？ほんとは何人なんだ？」

「えっと、ね」

彼女の言い淀む様に、公孫賛は悟ってしまった。

「まさか・・・こいつらだけか？」

「でもね、でもね！？みんな、とおっつても強いんだよ！？今はここに居ない二人だって、すごい軍師さんなんだから！！！」

と自信満々に言う劉備。

そんな様を見せられては呆れるしかない公孫賛であった。

「おいおい・・・少ないだろうとは思っていたが・・・ここまでは、ほんとに大丈夫なのかよ」

彼女の中では、やる気が大暴落していた。
そんな時だった。

「おやおや、人に見る目を持て、と仰った方がそれではいけませんぞ？伯珪殿」

「誰だ！！！」

「あゝ、良いんだ。関羽。こいつはうちの客将で趙雲。いつから居

「たんだ？趙雲」

突然現れた人物に劉備側の武人たちは警戒心をあらわにする。
しかし、公孫賛の一言により彼女の抱える将と知り落ち着きを取り戻したようだ。

もつとも、騒ぎの原因である趙雲は気にすることなく、劉備たちを見定めているようであるが。

「その辺りはお気になさらず。で、彼らですが」

「ああ。強いのか？」

その一言で、趙雲は些か失望したようであるが、気にした風もなく答えていく。

「ええ。そこにいる関羽殿は勿論、張飛殿もそちらに匹敵するほどの武をお持ちのご様子」

「そう言う趙雲殿もかなりできるようだが？」

「そうなのだー。趙雲おねーちゃんもかなり強そうなのだー」

「ふふ。さて？」

と、はぐらかすように言う。

そして思い出したかのように、この場にいる唯一の男性に目を移す。

「で、こちらのご仁は何者なので？それがしにもご紹介願えますかな？」

「えっと、趙雲さん、でいいのかな？この人は私たちのご主人さまで、天の御遣いの」

「北郷一刀だ。よろしく、趙雲」

劉備の話の途中から出てきた男。

彼は自分を天の御遣いだという。

「それはそれは。ふむ、そうしたいのは山々なのですが、もう士官の話はお済でしたか？」

「あゝ！！そうだよ！ねえ、白蓮ちゃん、私たちも一緒に戦っちゃダメかな？」

子犬の目である。

北郷、関羽はもとより、趙雲までも『これで断れます？』な感じで公孫贇を見ている。

これで断れば確実に悪役は公孫贇である。

そんな状況で断れるはずもなく・・・

「ああゝゝゝ！！！わかった。わかったよ！！まったく。これからよろしくな桃香」

「うん、ありがとう白蓮ちゃん」

「では、これからは私のことを愛紗とお呼びください。これから仲間になるのですから、信頼の証です。よろしいでしょうか？桃香様？」

「うんっ、愛紗ちゃんの言う通りだねっ」

「じゃあ、鈴々のことも鈴々って呼んでいいのだー」

「ああ。わかったよ。私のことも白蓮でいいよ。で、趙雲はどうするんだ？」

そう言う公孫贇の言葉に皆が視線を趙雲に向ける。

「そう言えば、白蓮ちゃんもさっきから真名で呼んでないよね？」

「そうですね。何か理由があるのではないのでしょうか・・・」

「あゝ、こいつはなちよつと変わっててさ、まあ、気にしないでく

れ。それでも仕事はしつかりやってくれてるから、こっちは助か
てるんだよ。だから、そこそこは私も気にしないことにしてるん
だ」

「まあ、そういうことです。こちらばかり真名で呼ぶのは失礼と思
いこつして字で呼ぶことにしているのですよ」

「ええ。でもでも、私はどうしても真名で呼んでほしいな。？
私は気にしないから、真名で呼んでね？愛紗ちゃん達もいいよね！
？」

「むう。桃香様がそう仰るのなら、我等に異存はありません」

「鈴々も気にしないのだー」

「私も何度かそう言ってるんだけどな・・・」

「ふむ・・・なれば、今後はそういたしましょう」

「ありがとう趙雲さん、でねでね？せめてその理由って言うの教
えてもらえないかな？」

「そう、ですな。ここまでしていただいて教えないのも不義理とい
うもの。良いでしょう。お教えいたしましょう」

彼女たちからの願いで真名を呼ぶことにしたものの、自分だけが呼
ぶことに罪悪感があつたのだろう。

趙雲は彼女たちから請われたこともあり、自分が真名を教えない理
由を話すことにした。

教える、そう告げると一拍おき、話し出す。

「白蓮殿には言いましたが、私は自分の仕える主を探すため国中を
旅しているのです。これまでの道中で気になったのは二人。一人は
陳留の刺史である曹操殿です」

「その名は私も聞いたことがある。なんでもかなりの傑物だとか」

「ああ。お会いすることは叶わなかったが、遠目で分かるほど覇気
にあふれたお方であった。もう一人は江東の孫策殿だ。こちらは現

在袁術殿の下にいるが、あの方は客将で収まるような器ではないでしょう。その内、袁術の腹を食い破って世に覇を唱えるでしような」
「それで、使えるべき主は決まったのか？その言い草ではまだのようだが・・・」

「実は、七割がた決まっているのだ。真名を教えないのもその方にお預けしてしまったが故。今こうして白蓮殿の下で客将をしているのは、私の我儘なのだよ。その方にも言ったのだが、一度国中を探して周る、と言った手前、やはり国中のめばしい将は見るべきだと思つてな。それ故、その方よりも仕えるに足る、と思つた方以外には真名を伏せさせてもらっているのだ」

「それはまた、随分な・・・それで、お前がそのお方とやら以上に、仕えるに足る人物はいたのか？」

問いに趙雲は、フルフルと首を横に振つてみせる。

「いや、今のところは誰一人として。もしこれから現れなければ、あの方のもとへすぐにでも馳せ参じるつもりだ」

「だが、桃香様はまだであろう？」

「ふむ、その通りだ。では、こちらにいる間、あなた達の戦ぶりを見て判断するでしょう。なに、こちらにはまだ当分いるのでな、気長に拝見させて戴くでしょう」

「ふっ、せいぜいその両目を見開いてみることだ」

「そうだそうだーおねーちゃんは凄いのだー」

「はは、まあお手柔らかに頼むよ・・・」

「ご主人さま！！そんな弱気じゃだめですよ！！趙雲さん、ぜえっつたいに真剣に見定めてくださいね？私たち頑張りますから！！」

自分たちにも可能性があると知って、趙雲獲得に意気を上げる劉備たち。

「まあ、仕事に差し支えないようになー。って聞いてないか」

そんな中で、こっそり不合格だった公孫贇は一人正論を吐くのだった。

< 3 s i d e o u t >

< s i d e 星 >

私は今、謁見の間へと向かっている。

城の兵士に聞いたところ、伯珪殿の知人らしき人物が来ているのだという。

伯珪殿の知人と言うからにはそれなりの人物なのだろう。

彼女は、かなり優秀な人物だ。そんな人物の知人が愚者ではないはずだ。

そう考えた私は、気配を殺し謁見の間へと向かったのだ。

謁見の間に着いた私を感じたのは物珍しさ、この一言に尽きる。

話を聞いていて、白い着物の男が天の御遣いだと彼女らが言った時には、危つく噴き出すところであった。

この時ほど、占いを話し半分で聞いていたことを感謝したことはない。

どう見ても平凡、立ち姿から何か武術をかじっている様子はあるが、その程度では兵卒に囲まれたなら終わりだろう。

それにだ、信を持って為さねばならぬ会談を擬兵を使うとは……

・
先ほどから聞いていても、神輿だ代表だのと……本人は謙遜しているのかもしれないが、それは担ぐ人間に対しての侮辱だとなぜ考えないのか。

見れば、関羽はかなり武に優れているだろうし、張飛も同じだろう。劉備とて人を引き付ける雰囲気を持っているようだ。

関羽と張飛は劉備に従っているように感じる。つまりは、もともとは三人で旅をしていたのだろう。

そこに天の御遣い殿が現れた、といったところか。
おそらく劉備の言に従っているのだろうな。

「おいおい……少ないだろうとは思っていたが……ここまでは、ほんとに大丈夫なのかよ」

まったく、伯珪殿はこういったところがいけない。

気を張っていればこの方も武人として優れた人物なのだが、如何せん気を抜きすぎる。

何故、眼前にいる人物の力量がわからないのか。

この二人であれば、擬兵の千人分には値するであろうに。

それにしても姿をさらして初めて気付いたが、この人物は不快だ。

天の御遣いだか何かは知らないが、賊の前に出た時のような気分にする。

切り捨てることができるだけ、賊の方がましかもしれないが。

確かに私の着物は肌が出ている部分が多いが、そう嘗め回す様に見られたのでは気分が悪い。

せつかく主に戴いた着物がこの男に見られているかと思うと堪らな

く嫌だ。

この男がここにいることになったら、少し丈の長いものを着ることにしよう。

主に褒めて頂いた身体をこの男に見せるわけにはいかないのだ。

ふむ、なにやらここに迎え入れることに決まるようだな。

しかし、何を勘違いしているのやら。仲間にしてほしいとは……

そもそも彼女たちは乞うて、この城の客将になる身だというのに仲間とは。

それは暗に、自分たちは部下にならないと言っているようなものだぞ？

この様子では伯珪殿は押し切られてしまうだろうな。

と言うことは、しばらくは彼女たちと行動を共にしなければならぬということか。

む、真名を預けると？

しかし、この身は既にかの方のモノ。

真名もかの地へ置いてきた故、教えることなどできぬのだが。

どう言ったものか……よし。少しばかり伝えておきましょう。

よしよし。うまくいったようだな。

そもそも曹操殿の処は番外であろう。

あのような空間に普通の感性を持つ私は、いることができない。

それに、あの曹操殿だ。きっとこちらが拒否しても無理にことに及ぶに違いない。

見る限り、どうやら私を引き入れたいようだな。

しかし、それは無理と言うものだ。何せ本当はこの賊騒ぎが治まった後、すぐにでも主のもとへ行く予定なのだから。

もともと、こうして諸国を周っているのも主の素晴らしさを再認識するためだ。

そうでも思わないとやっていられん。

折角身持ちの固い主を口説き落として、結ばれたと言うのに・・・
・虎のやつめ！！！！何が『情勢を見るために星殿に諸国を周っても
らえばいい。今まで主を探して旅をしてきたのだから、ちょうどいい
でしょう？』だと！！？？

思い出したら腹が立ってきた。

こんな日には酒を飲んで寝るのが一番だな。

幸い、主の肌着を戴いてきているので、今日はそれとともに寝よう。

劉備たちの評価は明日行こうのんびりするのでしょうか。

どう足掻いても、彼女たちの許へ行くことはないだろうがな。

それでも評価は真剣にせねば。

いつ主の役に立つかわからないからな。

主よ。

あなたの星は、いつでもあなたの前に道を照らしておきましょう。
そして暁の空で私を染めて下さいまし。

もっとも、あなたの空はいつでも夕闇に雪が降っているのでしょうが。

そこに輝く星もお忘れなきよう。

< s i d e o u t >
星

閑話・桃の木の下で・（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ネコ又マです。

劉備たち編でしたが、公孫贇編のような感じになってしまいましたね。

普通普通言われてる彼女も実はすごいんじゃないの？
てな感じでやってしまいました。

因みに、はわあわは初めての戦場の空気でダウンしてる設定です。
原作でも公孫贇が言っていました、彼らは結構失礼なことをします。

言うなれば友人に詐欺を働いたようなものです。

これは、はわあわでは却下するのではということにダウンしてもらいました。

まあ、原作ではこの二人がいたにも拘らずやっていた気がします。

・

御遣い殿は主人公補正がかかっていないと、この世界、この話ではこんな感じです。

女性に対する姿勢は高校生らしく進ってます。

廻らないくでは、主人公補正を百パーセントカットでお送りしますので、彼とくつつくヒロインは初期メンバーくらいかなー。

後半は星さんですね。

なにやってんだよ暁！！！！！！！！

きつとこれから彼は大変でしょう。

このあと呉に行ってから星は冥琳様達の許可を取るために忙しくなるはずです。

黒の人々は解りません。

一応ヒロインは候補も含めて全て出そろいました。
実は星さんは候補だけで終わる予定でした。
なにしてんだろ。

次回は本編に戻る予定です。
では、次回もよろしく願います。

9・掴んだ手と手（前書き）

皆様こんにちは。

ネコ又マでございます。

今回は何もありません。

早めに書きあげて、星の閑話を書かないと・・・

では、始まります。

9・掴んだ手と手

今朝、早馬が来ました。

内容は雪蓮に城まで来るようにとのこと。

いつものガキの我儘の可能性も大きいですが、最近の賊の動きからすると本隊が動き出した可能性もあります。

そうになると、もうじき山場です。

孫呉がどうなるか、今回から始まる戦いでは常に勝たなくてはいけないでしょう。

それだけ万全を期さねば、変わり目など乗り切れはしないでしょうから。

孫呉の領土を取り戻し、大陸が安定するまでを一つの戦とするならば、今という準備段階で勝負は始まっています。

そのための情報収集に、大陸中に黒を放っているのですから。

今の懸念事項は、賊、そして天の御遣いです。

賊に関しては、雪蓮が帰ってきたら大体判明するでしょう。

問題は御遣いですね。

私の少ない記憶に残っている名前、劉備。

その下にいると言うことは、やはり劉備は台頭するようになっていくということなのでしょう。

前回の天の御遣いの動向報告によって、その人物の容姿などが判明してきました。

まず、光り輝く衣を着ているそうです。

これはおそらくワイシャツではないかと思われませんが、下も同じだ
というので、制服が何かかもしれません。年の頃は蓮華くらい、と
言うことから考えて、高校生の可能性が大きいでしょうね。

報告では、武人の動きではなかった、とのことですから武に秀でた
人間ではないのでしょうか。

そうになると、彼はこの時代に関して、何らかで詳しい人間と言う可
能性が高くなってきました。

やりにくい事態ですね……

しかし、逆に考えれば今後の展開が読めている相手がいる、と言う
ことがわかっただけで良しとしましょうか。

わかっていれば動揺することも、侮ることもありませんからね。

冥琳と雪蓮にもそう伝えておきましょう。

彼女たちには私のこれまでのことを教えてあるので隠し事は一切あ
りません。

むしろ、魚とかの気持ちを聞かれて、こちらがびつくりしたくらい
です。

ふむ。制服、高校生、武人でない。

これらから察するに、二十世紀終盤〜二十一世紀頃の間人間でしょう。
ならば、劉備のもとが相応しいのかもしれませんがね。

まあ、それはさておき、雪蓮はなかなか戻ってきませんね。

時間的にはいつ戻ってきててもよさそうなものなんですが……

「冥琳、雪蓮まだ帰ってこないですねえ」

「そうだな。大方無理難題でも押しつけられてるんだろっ、と言

たいがおそらくは黄巾党とやらの対処について揉めてるんじゃないか？」

「かもしれないね・・・」

「ああ・・・」

きつと荒れてますね。

ん？

なんですかね、騒々しい・・・ああ。雪蓮ですね。

「暁」

「ええ。わかってますよ」

「「雪蓮だ（ですね）」」

む？冥琳ご機嫌ですね。

そんなに声がかぶって嬉しかったんでしょうか。

なんだか、「流石私」とか、「これで三日は戦える」とか聞こえてますけど。

確かにこれから戦場に行くんでしたら、三日はできませんからね。

野営地ではいつ奇襲があるかわかりませんし、他の兵もいるんですから。

見られる云々の話ではなく、士気に関わる問題です。上官だけそんなことしてたら、部下に示しがつきませんから。

ま、三日ですめばいいですね。

戦が長引けば長引くほど、負担は大きくなりますから。

「あゝきゝ!!!」

「つと!雪蓮、お帰りなさい」

「ええ!ただいま」

「まったく、あなたは・・・私もいるのよ?」

「え?え、ええ。も、もちろん気付いてたわよ。ただいま冥琳」

「はあゝ。まあ、そう言うことにしておきましょう。お帰りなさい雪蓮」

「あ、あはははははは」

ははは。

まあ、そこまで機嫌は悪くないようですね。

「策殿!帰ったか。して、どうだった?」

「ええ。それは、穩が来てからね」

「雪蓮様ゝ穩はここにいますよ」

穩、いつのまに・・・

というか、かるく体重預けないでください。

冥琳、左手が痛いです。なんか鳴ってますよ・・・・・・・・

雪蓮も、首が・・・後頭部が幸せが・・・痛いです。

祭姉もニヤニヤしてないで!!!!

「で、でっとう、だったんて、すかつ?」

「黄巾党の本隊が現れたわ。で、他にも分隊がいるみたいなんだけど、私たちは本体を叩け、だそうよ?」

「雪蓮、本体の数は?」

「十万。でも、戦闘が可能なのは五万、と言ったところだそうね」

「ご、五万!?それをどうやって我らでやれと言っんじゃない?」

「おそらく、孫家の兵を集結させる許可を得たのでしょうか?」

「さつすが暁。その通りよ。あと、糧食の方も手配してもらったわ
」

なるほど。

それならば、どうにかなるでしょうね。

しかし、孫家の兵すべて集めたとして一万がいいところ。

おそらく、他にも官軍が集まってくるのでしょう。

だとしたら全体の戦力としては互角にはなるでしょうね。

その中でどれだけ孫呉を世に知らしめることができるか、その一点を考えなければ。

「暁。考えはまとまったか？」

「ええ。祭姉に約束した戦が始まりますよ」

「なんと！ではこれが？」

「いえ。この戦から始まる数年間。それこそが私の約束した戦場で
す」

「ふむ。つまり、これからが本番と言うことになるか」

「その通りですよ冥琳。これだけ大規模な賊騒ぎ、鎮圧が遅れに遅れた官軍。民草の心はもはや朝廷にあらず、と言ったところですね。ですから、黄巾党の討伐はただ勝つだけではダメです。どれだけ我等の武を天下に知らしめるか、そこに今後の命運がかかっていると
言っても過言ではありません」

みんな考えてますね。

冥琳と雪蓮は抱きつく力を強めてますが。

「それで、策殿。出発は？」

「これから直ぐによ。蓮華達にも連絡を」

「はい。了解しました」

「冥琳と暁も準備を」

「わかった」

「ええ」

ん？

「そう言えば、袁術はどうしてるんですか？」

「ああ。あの子は分隊の方の相手をするそうよ。二万くらいって言ったかしら？」

「ほう。さすがに余裕だな」

「まあ、今は好きにさせてあげましょう。どうせあと少しの命なんですから・・・ふふふ・・・」

「そ、そうね」

「ああ。暁の言う通りだ。今のところ方法は炮烙を考えている」

「なるほど・・・牛に引かせると言うのも手ですよ？」

「あ、あのね・・・」

「ふむ。他にも魅力的な方法ばかりで困るな」

「む、無視しないでよー」

「何？」

「むー。早く行くわよっ！！」

「はいはい」

「むきー！！！」

さて、雪蓮分も補充したことですし、ここからは真剣にいかねればいけませんね。

本隊にどれくらいの諸侯が兵を出しているのか、おそらくはそこにいる者たちが今後の天下を狙う者でしょうから。

噂の天の御遣い殿も来るでしょうし、ね。

公孫賛殿の陣営にいらんでしたねえ。彼は。

そう言えば、星も公孫贄殿のところにいるんでしたっけ。
むー。黄巾党戦で出くわすかもしれませんね。

雪蓮達と仲が良くないんですねー。

雪蓮は飲み友達みたいな感じで、それほどでもないんですけど・・・
・・冥琳がね。

公孫贄殿の騎馬隊は見てみたいんですが、星と冥琳が出くわすと大変ですね。

そりゃあ二人だけだ、って言うっておきながら手を出した私が悪いんですが、あんなに真剣に迫られるとね。

冥琳にも説明したんですが、そう言う問題じゃないですしね。

はあー。

出くわしませんように。

「ねえ、冥琳。どこが来ると思いますか？」

「そうだな・・・先日話に出た、公孫贄は来るだろうな。それに、官軍からは皇甫嵩辺りが来るのではないか？」

「ふむ。妥当なところですね。他には西陵の馬騰殿も来そうですね。雪蓮はどう思います？」

「うーん。陳留の曹操も来るでしょうね」

「確かにな」

「それに」

「それに？」

「天の御遣いと行動を共にしているっていう劉備って娘も来るんじゃないかしら？」

「それは勘？」

「ええ。勘よ」

「なるほど。可能性は高そうですね」

「でしょ？」

「はあゝゝゝ。いい加減、雪蓮の勘で可能性を補強するのはよせ」

「まあまあ。いいじゃないですか、これで間違ったことがないんですから」

「そうよ？冥琳も少しは信用してくれてもいいじゃない！」

「私だつて信用してるわよ……でも、なんだか釈然としないのよ」

まあ、そんなところですよね。

我々軍師は理論だててものを考え、そこから策を展開します。

その過程をすつ飛ばして結論に行きついてしまう雪蓮の勘は、少し受け入れがたいものがありますから。

でも、冥琳だつて最後にはちゃんと話を聞いてるんですから、一言言いたいだけなんですよ。

「主上」

「虎か、どうしました」

「は！前方十里にある城に黄巾党本隊は立てこもった模様です。現在その周囲に諸侯軍及び官軍が野営地を設営中」

「数は？」

「敵は十万ほど、非戦闘員を含めると二十万ほどかと。こちらは孫

家の兵を含め七万ほんです」

「ふむ、到着は遅かった方みたいですね。わかりました。虎は引き続き情報を集めてください」

「は！では」

「だそうです。聞こえてましたか？」

「ええ。確認したわ」

「ああ。こつちもだ。……………あの泥棒猫が……………」

冥琳は放っておくとして、予想よりも多いですね。

その分こちらの戦力も多いですが、さてどうなりますかね。

「やっぱり我々が最後ですか・・・」

「そうみたいだな。雪蓮が本陣まで顔を出しに言っているが、他に来そうな者はないしな」

「ですね。諸侯も予想どおりでしたし、かの飛將軍が来ていたのは予想外でしたがね」

「それは同感だ。しかし、飛將軍の実力が少しでも見れると思えば儲けものだな」

「まったくですね。そういえば、公孫賛殿は来ていたようですが星は見かけませんね」

「ふんっ！別にあのような泥棒猫の一人二人気にしなくても良いだろうっ！！！」

「冥琳・・・そう言わないでくださいよ・・・」

【ふにつ】

「ん？ふに？」

あれーこの感じ知ってるー

「ふふ、あ・る・じ」お待たせいたしましたな、主。あなたの星、ここに参上ですぞ？」

「ははは・・・」

「こ・の・泥棒猫があ~~~~!!!!!!」

「おやおや。そこにいるのは陰険狐ではないか。どうした、お揚げが欲しいのか？生憎、私はメンマしか持っていないくてなあ」

「きつさまあ~~~~」

やっぱりこうなった。

敵は黄巾党ですよー。

聞いてないか。

9・掴んだ手と手（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

やっと、黄巾党編開始。

でも次回は閑話。

きつと修羅場。

その次が本編になります。

では、次回もよろしく願います。

閑話・星は暁を知る・（前書き）

大変お待たせしました。

皆様こんにちは。

ネコヌマであります。

今回は星sideで話が進みます。

にしてもスランプでした。

では、どうぞ。

閑話・星は暁を知る・

私の槍は天下を切り開く槍。

どんなに困難であろうと、すべて主君の為に貫いていく槍。

その為に鋭く、長く、大きくなければいけない。

全てを望むままに通す槍。

遍く夜を照らす、それが私の役目。

——
星

私の真名の様に。

輝かなければいけない。

全てを、全てを、全てを。

それがかつての私の望み。

暗がりには怯え、寒さに震え、朝日を疎んだ。

私は夏が好きだ、春が好きだ。

冬は—— 苦手だ……

ん？

ここは・・・・・・・・

「ん・ふああ」

ここはいつたどこだ？

内装からして賊に捕らえられたと言つことではなさそうだが・・・
一体どういうことだ？

【トットットットツ】

誰か、来たのか。

ざつと見ても私の槍は見当たらない。
と言つことは、相手に奪われていると考えた方がいいな。

体の方はなにもされていないようだが、どうにも重く感じるな。
これでは戦闘になればひとたまりもないだろう。

大人しくしているのが無難か・・・

「んー。おや、もうお起きになられたんですか」

といって入ってきたのは、私と同じくらいの年の男だった。
背はおそらく私よりも高いのだろう。

こげ茶色の髪と目、そして私の衣と似たものをおつていた。

立ち居振る舞いから見て、武を嗜んでいることが見て取れる。

しかし、巧妙に隠しているのか、はたまた大した腕ではないのか実力のほどはわからない。

この状況で不確定なものに挑むのはあまりに非現実的であるし、先ほどから体が思いのほか動いてくれない。

このような状況では大人しくしているのが得策であろう。

何より、ここにつれてこられた経緯も聞かなければならぬことであるし。

「ああ。大丈夫のようだ。少し体が重いかな」

「ふむ……それは重畳」

それにしても……なんだ、この男は？

先ほどからずっとニコニコニコニコと。

私が横になっているのがそんなにおかしいのだろうか？

ハッ！？

まさか、私の弱り具合から何かよからぬ妄想を繰り広げているのでは！？

ならばこれはニコニコではなく、ニヤニヤなのか!?

「えーと・・・・・・・・どうかなさいましたか？」

「い、いいいや。なんでもないのだ。うむ。あろうはずがないでしょう。ええ！それはつもうつ！」

「そうですか……それは失礼を」

「いえ、いいですよ。ハハハハハ……」

ふう。

危うく感づかれるところだった。

「申し遅れましたが私はここで文官兼武官をしております、程禁柳蓮と申します。あなたの名をお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「これはとんだ失礼を。私は趙雲子龍。ただの武芸者です」

どうやら彼は礼儀をわきまえているようだ。

ということは先ほど言った文官だということのも嘘ではないのだろう。

文官であるにしても、そこかしこにいるような腐った文官とは違い、まともな部類に属するものなのだろう。

【クスクス……】

「む？なんですか？何かおかしいことでも？」

「いえ……ふふっ」

「むう」

一体なんだと言うのだ？

私は何かおかしいことでもしたのだろうか？

そんなはずはないのだが……

まさか先ほどの予想道理、よからぬことでも……

「いえ、ね。あなたがここにいる理由にトンと覚えがなさそうなので……つい」

「むう……それはそうですが、解らぬものは仕方がないのではありませんか？それを笑うなど……少々意地がお悪いのではないか？」

「ふふつ。それもそうですね。失礼しました。気を悪くしないでくださいね？」

「わかればよいのです」

「ふふふ。ではお聞きますが、あなたはここに来るまでのことをどこまで覚えていますか？」

「ここに来るまで、ですか。はて……建業に向かって歩いていたのはおぼえているのですが……それ以降はトンと思い出せません」

こう……なんと云うか靄がかかったような……

「ふふ。それはそうでしょうね。何せあなたは高熱で倒れていたんですから。私の隊の者が見つけていなければ大変でしたよ？」

なんと！

では私は勝手に勘違いをして、恩人を変態だと考えてしまっていたというのか……

「かたじけない……どのようにこの恩をお返しすればよいのか見当もつきませぬが、某にできることでしたら如何様なことでも致しますよう。今はこのような身ゆえ何もお役には立てませぬが、体が治ったあかつきには、必ず！」

「はは。そんなにかしこまられても困ってしまいますよ。ふむ、そうですね……そういえば、あなたはどのようにして建業へと？」

「私は……自分の槍を振るうにふさわしい人物を求めてこの国中を旅しているのです。その中で江東の虎の遺児がいると聞き及び、どのような人物かと思ひまして。あわよくば、しばし客将として傍で見定める機会が得られないか、と考えた次第です。もつとも、あなたの言に因ると私は孫策殿と縁がなかったようですが……」

「ふふつ。それはまた……」

「ただ、どうもこの方という調子が狂う。丸く、緩く、弛んでいくようだ。」

「これは、悪くないのかもしれない。」

「しかし、この身は槍。」

「いずれ現れる主の敵をことごとく突き貫く、槍。」

「望まれるならば、天でさえ貫くと。そう決めたのだ。」

「だから、この空気になじむことは許されない。否、許してはいけない。」

「この軋みは自分の至らなさ故。」

「決して、決して心が軋むはずなどないのだ。けれど拳は迷いのように、白く曇り、迷いは赤を滲ませる。」

「静かに、そう。」

静かに言葉の続きを促す。

「どうしたのです？」

「いえ、ね。あなたは勘違いをしているようなので。どちらかといえば早とちりですか」

「どういう、ことですか？」

震えていないだろうか。

他愛のない会話ではないか。
優しそうな御仁ではないか。

なぜ震える心配などする。

なぜ言葉の先がこんなにも気になる。

なぜ？

「？震えているようですが・・・やはりまだ病み上がりだった様ですね。大丈夫ですか？熱は・・・無いようですが、少し長々と話しすぎたのかもしれないね。今日のところはこれくらいにしておきましょうか？」

「そのようですね・・・ですが、先の言葉の続きだけでも教えては戴けませんでしょうか？」

彼に触れられていた場所から熱が去ってゆく。

それは熱の心地よさとともに、私の震えも連れて行ってしまっていた。

彼はクスリと笑みをこぼし私に告げた。
それは、暖かく、それでいて涼しげに。

朝日のような儂さで。

「わかりました。趙雲殿、あなたは先ほど”縁が無かった”と言いました。ですが、それは違います。孫策伯符、その人こそ私の主なのだから」

そう告げた彼は嬉しそうに私の手をとった。

「体が治つたらよろしくお願いしますね。趙雲殿？」

朝の寒々しさは、空が地上に住むものを焼いてしまわぬように、夜と一緒に現れるからだと言ったことがある。

朝は、昼のように太陽だけでなく。

夜のように星星だけでなく。

太陽が夜の手を握って星を暖めながらやってくる。

だから朝は昼のように暑くなく、夜のように凍えることもないのだと言う。

私はこの時、目の前の彼がどうしようもなく尊いように感じたのだ。

まるで、いつか聞いた朝日のようだと。

槍は少しずつ形を変えていた。

消えていた赤は、知らず上に上がってきていた。

閑話・星は暁を知る・（後書き）

お読み戴きありがとうございます。

今回の話は前後編になります。

きりがいいところで、と言うことを考えてこの形になりました。

だいぶ期間が開いてしまいましたが、次回は早めにあげたいと思います。

重ねて、今回の更新が遅れてしまったことをお詫びいたします。

次回もよろしく願います。

閑話・流れるかとどまるか（上） - （前書き）

皆様こんにちは。

ネコヌマと言うの名のなにかです。

一度予約投稿によって、不完全なものをあげてしまい申し訳ありませんでした。

遅れに遅れましたが・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・ではどうぞ。

閑話・流れるかとどまるか（上） -

< s i d e 星 >

私がこの町に滞在して二週ほどの時間がたった。

程禁殿や孫策殿はやはり忙しいようで、初日に会話して以来、ほぼ全くと言っていいほど会うことがなかった。

それでも、孫策殿は執務の合間を縫って会いにきてくれたり、その時に紹介された黄蓋殿には調練に参加させてもらえたりと中々に充実した毎日を過ごせている。

あれからそれなりに時間がたったが、未だに孫策殿との会話を思い返すことが多い。

あの程禁殿との会話の後、私は孫策殿と対面することになった。

この時の私は、程禁殿が孫策殿を呼びに出て行った後、自分の幸運をただ嬉しく思った。

道中で倒れてしまったことは、不運といえるかもしれないが、そのおかげでこうして孫策殿のもとにたどり着くことができたのだから、と気が緩んでいたのだろう。

話題の陳留の曹操殿は一度眼にしたことがあったから、孫策殿はどのような方が、と少し浮ついた気持ちで構えていたのだ。

それがいけなかったのかもしれない。

実際にあった孫策殿は、いや、傑物は、眼にするのと実際に対面するのでは大違いなのだということを理解させられた。

親しい友人に話しかけるかのような口調。

ニコニコと笑い、それでいてどこかつかめない雰囲気。

始めてみた孫策殿はまるで猫のような人物だった。

以前見た曹操殿の、平伏してしまうような感じが彼女から全くしなかったことに、私は軽く驚いた。

だが、会話を続けるうちに、また別の王の器を垣間見た。

曹操殿の王としての形、それは”孤高”だろう。

彼女は自身の絶対的な能力と権力によって国をまとめていくのだと感じさせられた。

集う者たちも厳選された兵となることはまず間違いない。

しかし、それはあくまでも曹操殿に集まる者たちだ。

つまり、国に集まるのではなく、人に集まるということだ。

それだけ曹操殿が優れた人物なのだという証明のようなものだが、そのような国は続かない。

曹操殿がいくら優れた人物であろうと彼女一代限りの国で終わるのだろう。

対して孫策殿には、支えてくれる人物たちがいる。

彼女は決して万能というわけではないし、普段から偉ぶることもない。

彼女にとって、国とは家族なのだ。

周りにいる仲間もまた同様。

すべからず家族のために動いている。

彼女の王としての在り方は”屋台骨”なのだろう。

中心となり、支える。

戦場においては真つ先に先陣をきり、周りを鼓舞する。

ただそれだけ。

それでも、きっと彼女の国は終わらない。

皆が家族だと言うその国は、その一人でも生き残ることが国の存続につながるのだから。

程禁殿曰く、『縦の国』。

横一列に手をつないでいる形ではなく、かといって上下に従えていくわけでもない。

先頭にいる王に続き歩いていく国。先頭が倒れても次の者が、その次が、そうして続いていく国。

周瑜に言わせれば、『孫呉の女の執念ほど恐ろしいものはないと言ふことだな』と言ふことらしい。

そのことを聞いた直後に見た奴の顔に妙に納得したものだ。

”女狐の執念は恐ろしい”とよく聞くな、と。

そもそも、私が程禁殿に話を聞いているとどこからともなく現れるって……この時点でおかしいだろう。臭いで分かったって一体。

孫策殿も似たような節があるし……それを鑑みると言いえて妙だな。

ふむ、いろいろと考えを巡らせてみたが、わかっていることは変わらんな。

ここは良い土地だ。

今現在の状況を考えて国などと大っぴらには言えないが、必ずや良い国になるであろう。

その時な自分がどのような位置でその様を見ることになるのか、楽しみではある。

案外、間近で見ることになるのかもしれない……

まあ、今の私が考えても栓ないことか。

さて、思案にふけるのはこのくらいにしておくか。

昼は程禁殿と食べる約束をしたことだし、何より、もうじき約束した時間の様だしな。

しかし、メンマのうまい店に連れて行つてはもらえないだろうか。紹介でもいいのだが……。この町にきて以来これといった一品に出合えていないのが残念でならない。

程禁殿はメンマは好きだろうか？

ん？あれ、は……

<side star out>

ここ二日ばかり私は同じことをずっと考え続けている。

それは、最近の冥琳は前にもまして綺麗になったとか、新しいメガネがものすごく似合っていてそれを褒めたらその日は寝られなかったとか、雪蓮がなんとも言えない色気を出していてつい半刻ほど仕事を抜け出してしまったとか、アソアソに出ていた新作が雪蓮に似合いそうだったので買っていったら雪蓮が喜んでくれてそれがまた可愛かったとか……

ではなく、先日より滞在している女性についてです。決してその女性が冥琳たちとはまた違った美しさを持っているとか、そんなことは少ししか考えていない。いいや、彼女が駄目だとかそう言うことではなくて、どちらかと言うととてもいいのではないか

とは思いますが、二人のこともあるし、やはり二人がいれば十分かな、なんて思っわけで……

……と、ではなくて。

んんん。

滞在している女性、趙雲殿のことですが、就職活動中の武芸者とのこと。

しかも、趙雲と言えば後に劉備の下で名を馳せる勇将。私の拙い前世の記憶に残っているくらいの有名人物です。

そんな人物が今呉に来ている。

となれば少しくらい欲が出てしまっても仕方ないでしょう。

史実では趙雲は槍の名手だったそうですが、こちらの趙雲殿はどうなのでしょう。

彼女の得物も槍、とのことでしたがその腕は如何ほか……

何よりも、私は彼女を劉備の下へやりたくないんですよ。

そもそも、私の中で劉備と言う人物の評価は大分低い。

それは私の三国志についての知識の無さが生んでいる偏見かもしれませんが、それにしだって理由と言うものがあります。

史実に描いて劉備は、かの曹操ですら羨むほどの人材を手元に揃えていたそうです。その人材全てが誰だったのかは残念ながら私の知識にはありませんが。

ですが、一つだけ重要なことは解っています。

それは、それだけの人材が手元にありながらも劉備が天下を取ることはできなかったと言うことです。

逆に言えば、それだけの人材が集まる何かがあった、と言うことなのでしょうが。

それが運によるものなのか、はたまた天性のものか……どちらにせよ、劉備には集める才はあれ、使う能力は欠乏していたということでしょうね。

おっと、脱線しましたね。先ほどの考えに戻しましょう。

劉備の下に趙雲をやっているのか？

答えは、否。

断じて、否。

理性的な部分が、劉備側に彼女がついた場合の戦力について危険であると判断を下し。

感情的な部分が、他のところにいかないでほしいと訴えている。

ん？なんだか振られたみたいな考えですね。

私は彼女に惹かれている？

となると案外私は惚れっぽいのでしょうか？

そんなことはないはずなんですがねえ。

うん、いや、うん。

きつとそこまでではない。

現に、今彼女が雪蓮たちにとって危険であると判断したら躊躇わずに殺せる自信がありますしね。

おそらくこの感情は親愛の情なのでしょう。

知り合ってまだそんなに経っていない人物に、こんなにも情を向けるなんて少し不思議な感じがしますね。

ですが、そうやって考えてみると、彼女の雰囲気はどことなく私の最愛の女性たちに似ているように感じてきます。

きつとそれが原因の何割かを占めているのでしょうかね。

うん。

少し納得が이었습니다。

さて、そんな感じでここ二日ばかり趙雲殿のことを考えていたのですが、私にも政務と言うものがあり実際に話す時間が取れなかった、というのが現状になるわけです。

折角滞在していただいているのに話す時間さえとれないのは勿体無いことだと思い、今日の昼食時、漸く時間を空けることができたので趙雲殿を誘い一緒のお昼となりました。

もつとも、政務だけではそんなに時間はとられなかったのですが、

ちびガキがいつになくこちらを警戒しているらしく、そちらで時間を取られたのが事実です……

本当にどうやって報復してやろうか……あゝ、蛭の池なんてのも良いですね。うん。候補に追加しておきましょう。そうしましょう。

と、昼食です昼食。

とは言え、誘ったもののどこで食べるかなんて決めてませんでしたね。

そうこうしている今も足は確実に待ち合わせの場所に向かっているわけで……

しかしどこに行きましようか。

本当であれば趙雲殿の好物等で選ぶのですが、如何せん今までの会話の中でそれらしいものもありませんでしたし……ふむ。どうしましようかねえ。

私だけだったら馴染みの甘味処で済ませても良かったのですが、初めて一緒にご飯を食べる相手となると……そうはいかないですよな。

それでなくとも私の行きつけは、初めて連れていく人にはかなりきつい場所らしいです。一緒に行って平気だったのは冥琳と雪蓮だけでしたからね。

となると、どこがいいですかねえ。

酒屋の隣にある店は量が多すぎるし・・・肉屋の近くの店は定休日か・・・

んー。

無難に中通りの店にしましょうか。

あまり悩んでみても答えの出る問題じゃないですしね。

どこの店だってそれぞれに味があるんですから、今回はそこでよしとしましょう。

・・・・・・・・

「なあーんて考えてたんですけどね・・・」

はあ・・・

「何でいるんですか・・・冥琳・・・この時間はまだ政務中のはずですよね？」

「なに、何故だか嫌な予感がしたものでな。具体的に言えば旅人が盗人になるような、ね。普段はこの手のものは信じないのだけれど・・・どうも最近落ち着かなくてつい、ね」

「・・・どんな予感ですか。ま、私はかまいませんけど、趙雲殿にはちゃんと話したんですよ？」

「ええ。もちろんよ。丁寧丁寧にお話したわ」

「そうですか・・・」

そんな感じはしてましたけどね。

何故なら隣にいる趙雲殿がどこか煤けて見えますから。

大分お話したんでしょうね。

「それで？結局どこに行くの？」

「あー。そのですね、最初は『いろり』かなと思ったんですけど、流石にあそこは拙いかなと思ったので中通の『ふや』に行こうかなと」

「確かにあそこは初見では厳しいものがあるわね……その点『ふや』なら、まあ無難なところね」

冥琳。

そう言いながら勝ち誇った顔で趙雲殿を見るのは何ですか？

例の予感ですか？

そうですか？

そうなんですね？

ほら、趙雲殿だって何もしてないのにそんなことしたら気分を害されますよ？

ね？趙雲ど……？

「趙雲殿？どうかしましたか？」

「いえ、その『いろり』と言うところではダメなのでしょうか？」

いえ、って！

今、何か面白そうなものを見つけた！って感じの顔でしたよね？

「だめ、と言うわけではないのですが・・・」

「では！そこにしましょう！」

「いや、そう仰るなら構いませんが・・・どうしてそんなにそこに行きたいのですか？」

「何やらそちらの周諭・・・殿から挑発を受けているような気がしました。それに先程の感じだと、いつもはそちらに行かれていたのではないですか？」

冥琳・・・・・・・・あまりそう言ったことは控えてくださいよ・・・
・お客さんですよ？

それに趙雲殿もそんなににじり寄らないでくださいよ。
ほら！冥琳の後ろに・・・？

うしろに・・・・・・・・・・雪蓮？
??????

気のせいですね。

二人が感覚を共有してるなんてことないですよね！？
生霊みたいなものなんて見えてませんよね！？

と、とにかく！

「仰る通りです。いつも行く店は少々癖があるのでどうかと思ったのですが・・・そう仰るならば、そちらに行きましょう」

ふゝ。

なんででしょうね・・・先を考えるのがつらいのは。

それから虎、町民に成りすまして尾行するのはどうかと思いますよ。

あと、その短刀をしまいなさい。

閑話・流れるかとどまるか（上） - （後書き）

お読み頂きありがとうございます。

ネコヌマでございます。

拙作を御待ちの皆様には長らくお待たせいたしました。
そうでない皆様には・・・また書いしまいました。

さて、今回で星編は終わりの予定だったのですが・・・・もう二話くらい続きます。

てか、短いと違和感ひど過ぎて大変なことに・・・・
こんな短期間では恋愛感情なんて！
です。

なので、二話くらいかけて半年くらい進めてみる感じになります。

では、次回は長くても二週間後には更新する予定ですので、期待せずにお待ちいただければ幸いです。

次回もよろしく願います。
ネコヌマでした。

閑話・流れるかとどまるか（中） - （前書き）

ネコ又マです。

遅くなりました。

今回姑めーりんです。

では、どうぞ。

閑話・流れるかとどまるか（中） -

< s i d e 星 >

正直に言おう。
早まったと。

あの時、私は程禁殿と周喩の間にある空気が何故だか気に入らなかった。

二人がそう言う仲なのは知っていたし、出会って間もない程禁殿に恋慕の様な感情を抱くほど私は惚れやすい人間ではない。

では、何が気に入らなかったのか？

簡単なことだ。

周喩の勝ち誇った顔が気に入らなかったのだ。

ともあれ、あの後私たちは程禁殿の行きつけだと言う甘味処に行くことになったのだ。

そう、甘味処。

この時点で何かおかしいと、そう思っべきだったのだろう。

「程禁殿……これは、なんでしょうか？」

ここについて早々、どうやら常連らしい程禁殿は店主と思われる老夫婦と和やかに会話し始めた。我々はその間少し奥まった場所に通された。周喩の様子だといつもこの席なのだろう。

だされた茶を飲み終わる頃に程禁殿が戻ってきた。話を聞くとどうやらこの店に最近来る機会がなかった為、少し話しこんでしまったと言う。すみません、と謝る程禁殿に私は構いませぬと返した。あの様子だと相当に付き合いがあるのは想像に難くないことだからだ。そうであれば仕方のないことだ。

そうこうしているうちに何も頼んでいないことに気がついた。

何にしようか考えようにも奥まった場所故か品書きの様なものも見当たらない。

どうしたものかと思い程禁殿たちを見ると二人でいい雰囲気を作り上げていた。

二人には良いかもしれないが、初めてこの店に来た私を放ってそれはないのでは？と思い、注文は良いのかと問うと、もう済んでいるのだと言う。

どうやらこの店に来て程禁殿が注文する品は決まっているらしく、席に着いた途端調理が始まっているのだと言う。

その時私は隣でしてやりたりと嗤う周喩を見逃さなかった。おそらくこいつが説明することになっていたのだろう。どこまでも汚い。

軍師汚い。

そうこうしているうちに出されたのがこれだ。

黒い汁？の様なものの中に白い・・・団子？だろうかそんな感じのものが数個。

これまでの旅においても未知の料理に、私がこうして尋ねてしまうのは仕方ないことだと思う。

私が尋ねてから大分経つが、程禁殿は一向に答えてくれる気配がない。聞こえなかったのかと思い、再度尋ねるも状況は変わらず。いい加減じれてきた。いつそ黙って食べてみ「くくく」ように思ったが何か言いたげな奴がいるな。

「なんだ？ なにかいいたいのか？ 私は今からこれを食べるところだ」
「いや、なに、甘味を食べている時の暁に話しかけても無駄だ、と教えてやるべきか迷ってな。それに、だ。これ、ではなく白玉だ。ここ以外では知らんが、この黒いものはあんこを濾したものだ」
「ほう。そうかそうか。もうすこしばかり早く伺いたかったものだなあ。軍師殿？」
「いやいや、気にするな。暁の顔を見ていたらウンウン唸りそうな顔があったのでお節介を焼いただけのこと」

こ、この女あ……………

「ふふふふふ」 「くくくくく」

「？ 趙雲殿、食べないんですか？」

「いえ！ 今戴くところです。では……………ぐっ！ ー！」

程禁殿……………甘さは控えめに……………それと、茶をください。

甘いのに痛いのです。

あの後、何とかすべての白玉を食べきった私が見たものは、新たに注文したであろう大量の白玉をほおばる程禁殿だった。なんだあのリスは・・・とっさに抱きしめようとした私はおかしくないはず。だが、その瞬間感じた複数の殺気には踏みとどまらずにはいられなかった。むしろ踏みとどまれた私を褒めてあげたい。目の前にクナイが落ちてきたら誰だってそーする。

んんん。

その後、程禁殿から近く戦いがあると聞いた私は、是非もなく参加させていただけよう頼み込んだ。平穩も良いが、やはり私は武人である。居場所とするにはその力が十全に発揮できる場所であるかを見極めておきたかったからだ。

程禁殿から指示されたのは中盤。前線で戦う兵たちの討ちもらしを無くし、後衛の周喻たちの護衛ともなる配置である。私としては最前線にて槍を振るいたかったわけだが、如何せん無理を言った手前もあり、この配置に文句などはなかった。

戦が始まり、指示された位置で槍を振るっていると今まで知らなかった彼らの一面が見えてきた。それは戦場にあつてなお強く私を引き付けるものだった。

知らず私の振るう槍は速さを失い、踏み出す歩は緩やかになっていった。

戦場において、不謹慎極まりないことなのだが、私は目の前の光景に魅せられていたのだ。

剣と弓を交互に使い驚くような速さで敵を減らしていく黄蓋殿。や後方にて的確な指示で味方を動かしていく周瑜。

何よりも、最前線で敵兵を斬り倒し続けている孫策殿と程禁殿。

その姿に私はここが戦場と言うのも忘れ、手を止め、足を止めし、我を忘れていた。

苛烈なまでの攻めで敵を寄せ付けない孫策殿とは違い、程禁殿はそれなりに隙が多いように見える。しかし、気がつくと屍が一つ増えている。何故、と思い目を凝らしてもやはりまた一人、また一人と切り捨てられた屍が増えていく。どうみても付け入る隙のある動き、どう鼻肩目を使おうと一騎当千足りえないその動きに、ことごとく敵兵が葬られていく。

「ふむ。武人と言うのは敵兵の中で呆然とする人物を言うのか？」
「っ！！」

かけられた声に槍を構えると、後方にいたはずの周瑜が居た。

どうやら私はだいたい長い間呆然としていたらしく周囲には五十を超える敵兵が倒れていた。

察するに、私が呆けている間中誰かが守ってくれていたのだろう。私にかすり傷すらつけることなく守りきれる誰かが。

「何を考えているのか予想がつくから言うておくが、私ではない。私は今ここに来ただけだからな。ああ！気にするなよ？この戦はもうじき終わる。そもそも暁と雪蓮が戦場にいる時点でこちらに負ける要素はあり得ないのだからな」

あの状態を見られていたのかと思うと体に震えが走る思いだが、こいつに守られていたと言う最悪の状況が回避されただけでも助かったのだらう。

「極端な話をするならば千や二千が相手ならば暁と雪蓮だけでも事足りる。最も、疲労や武器の消耗、敵軍師の存在やその才覚なども考えると絶対にさせられないことではあるがな」

「それは言い過ぎではないか？孫策殿ならば分かるが、程禁殿はどう見繕ってもそこまでの腕ではないように見えるが？」

確かに孫策殿の戦いぶりを見ればそのくらいの数の敵とも戦っているかもしれない。

しかし、程禁殿に関しては言い過ぎではないだろうか。腕の方もそうなのだが、密集地に飛び込みすぎるくらいがあるのではないか？あのような戦い方では・・・おい、なんだその顔は？その、まるで解ってないとも言いたげな表情は？ああ？

「いいか？暁と比べるまでもなく低能なお前にもわかりやすく教えてやろう。まず言うておくが、暁の戦い方はすべて計算づくのものだ。密集地に飛び込んでいくのもその一つにすぎない。例えばだ、暁は自分の方に向かってきた敵兵を意図的に雪蓮の方へと誘導していたな？これは弓兵の攻撃に対するけん制になっている。大体的場合、弓兵は味方の多い場所への攻撃はしないものだからな。そうして、ある程度の敵兵を与えることで、雪蓮の安全を確保するようにしていたわけだ。それにな、ある程度先の読める人間には密集地は危険にあらず、だ。かえって敵の動きが限定されて戦いやすいそうぞぞ？」

なるほど・・・そう言われて考えると先ほどまで見ていた動きにもいくらかの統合性が出てくるな。

「って！！何で私の考えていることが分かる！？」

「ふっ。愚問だな。お前だろうが誰であろうが、暁に関することを考えている人間の思考を読み取ることなど造作もないことだ。そもそも今回の戦いお前がこのようになることは想定外だったのだ。その想定外を埋めるためにあおして暁が長々と前線に出張っていると言うのにお前と言うやつは。大体暁は本来私と雪蓮の中間に位置して動くのが常だと言うのにあんなにも前線に出て……そうだ……い……いや……だが……そうすると……」

どうやら軍師殿は壊れてしまったらしい。

決してにやにやと虚空を仰ぎながら体をくねらせる様が気持ち悪かったわけではない。断じて違う。

それにしても私のせいで程禁殿が前線に出張っていると聞いてはこうしてはいられない。

私は客である前に武人なのだから。

武人は自分の武で語らねばならない。

勿論、この戦いの後には謝罪に向かうつもりだが、その前にけじめをつけねばなるまい。

今の私に出来ることはこの戦いを少しでも早く終わらせる為に槍を振るうこと。たとえ数瞬であろうとも速く。少しでも自分が何かを返せたと、何かを救えたと、そう言えるように。

「はあああ！！！！」

私は今、槍としての務めを果たそう。

< s i d e e n d >

めーりんにつき

5さい

きょうは、まえにあつたおとこのこがあそびにきた。

いつもまわりをきよきよろみていてなんだかわつたこ。

ていきんっていうなまえのこだけど、りゅーれんってあざなのほう
でしえんはよぶみたい。わたしもそうしたほうがいいのかな？

こんどきいてみよ。

閑話・流れるかとどまるか（中） - （後書き）

生きててすいません。
ネコヌマです。

遅れました。

予告しておきながら、はやめに、とか言っておきながらこれです。

次回はひと月後、とりあえずそう言っておかせてください。
ふ、フラグじゃないですよ？

とにかく、またお読み頂きありがとうございました。

次回につきましては冗談じゃなくひと月後くらいになるかと思いません。

それよりも早ければ筆が進んでいると言っことで。

一応次回で星編終了を見込んでいます。
その分長くなるかと思えます。

もしよろしければ次回もお読みいただけると幸いです。
では、ネコヌマでした。

閑話・流れるかとどまるか（下） - （前書き）

えー、どうもお久しぶりでございます。

ネコヌマです。

さっさと更新するつもりがありえないくらい遅れてしまいました。
暇つぶしに眺めてくださっていた方にはかたじけなく思っている次第です。

さて、この上前書きにまで時間をかけるのもあれですね。

では、どうぞ。

閑話・流れるかとどまるか（下）・

さて、と。これからどうしましょうか。

結論は決まっているとはいえ、その方法をどうするか考える必要がありますね。

周囲を見渡してみてもこれまでの様に囲まれている様子もありませんし……むしろ、徐々に賊が撤退しているようですね。散発的に攻撃を仕掛けてくる相手にもどこか自棄になっているくらいが見えます。

通常であれば深追いはせずに残りだけを始末するのですが、我々はそう言うわけにはいきませんからねえ。

ともかく相手の状況を見極めなくては。

おそらく強引に彼らを殿に撤退をはじめ……いえ、その可能性はあり得ませんね。確か、賊の頭目と思しき人物は少し前に私と雪蓮を分断した後、雪蓮に斬られてましたから……かなり雪蓮の気に障るようなことを言っていましたので、まず原形はとどめてないでしょうが……

少し時間は遡る。時間的には趙雲が冥琳にからかわれたほんの少しあと。

その頃、暁と雪蓮の周囲は賊が敷き詰められていた。

生きているもの、死んでいるもの。

立っているもの、地に伏せているもの。

五体満足なもの、体の欠落したもの。

生きているものも死んでいるものも共通しているのはすべからく顔から生気が抜け落ちてのことぐらいであろう。

ただの二人で味方より突出し、敵陣営の真っただ中に飛び込んできた命知らずの愚者。それも一人は男の欲望をこれでもか、と言わんばかりに刺激する妖艶な美女ときたものだ。

これでいきり立たないような聖人君子など、賊の中にはいる筈もなかった。

どれだけ腕に覚えがあつて飛び込んできたのであろうと高々二人。陣営同士の総数では元来拮抗出来るだけの数をそろえているのだ。いざとなれば、いや、遠くない先に体力が尽きて動けなくなるだろう。その時に生け捕りにでもしてしまえばいい。

何やら前線と分断されてしまっているような気がしなくてもないが、それでも対するは600人を超す軍勢。

どうあがいたところで二人では……………

などと考えていたのは敵の中でも少数……………などと言うことは一切なく、考えの程度の差こそあれほぼ同じことを大多数が考え

ていた。

中には今回の戦いの後を考え、股間を熱くしながら迫って逝ったものもいたほどであった。

しかし、そんな彼らも仲間が一人斬られ二人斬られ、立っているものと倒れているものの比率が逆転した頃、漸く相手の実態に気付き始める。

二人は突出しているのではなく、もともとそう言う布陣であったのではないかと言うことに。

当然ながらそういったことに思い当るような聡い人物は、超昂状態になる野郎どもが多く存在する陣営に存在するはずもなく、ただ漠然とあの二人は拙い、そう考えるだけに留まっているのだが・・・。

目を血走らせ、我先にと斬りかかっていた賊の勢いも次第に衰え、中にはじりじりと後退しだす者まで現れる始末。

それも当然のことである。そもそも賊たちは正規の訓練を受けたわけでもなく、これといった理想や大義を掲げ戦っているわけでもない。ただただ楽な暮らしがしたい、奪われるものよりも奪うものになりたい。

そんな逃げの姿勢だらけの考え、自らに頼る所のない非力な存在。

元来彼らは弱者だったのだ。

搾取され、虐げられ、生まれた意味を模索しながら死んでいく。

そんなどこにでもいる民草の一人であった彼ら。

そんな彼らに一言囁くだけでいい『誰のせいだ?』と。

彼らは誘いに乗ってしまったのだ。
他人に価値を預けてしまったのだ。

自分たちの厳しい現状に、先の見えてしまっている未来を。
諦め、原因を手の届かない所に求めたのだ。

自分たちの不遇も、辛さも、すべからく都に住む皇帝の責任である。
だとするならば、そんな奴の為に税を納めるのはおかしいのではないか。

そう考えたものが最初にとる行為は、納税の拒否であつた。

しかし、当然のことながらそのようなことが認められるはずもなく、
各地を治める役人によって彼らの生活はさらに追い詰められていく。

そんな中である、追い詰められ続けた精神はいとも簡単に臨界点を
超える。

抑圧されてきた者たちほどその反動は大きい。

そしてその矛先が向かう先は皇帝ではなく、自分たちと同じ”弱者”
であつた。

彼らに賛同しなかった者たちを見せしめの如く襲つた。

奪い、壊しあらん限りの暴虐を尽くした。

そこには自分たちの不平も、不満も、全てをぶつけることのできる
存在があつたのだから。

その後、暴徒と化した彼らの標的は自分たちよりも少しいい生活をして
いるものへと、徐々に変化していった。

そうやって徐々に狙う対象を格上げしていった彼らはこの日程禁達

の街へとやってきたのであった。

まさに溺れる者は藁をも掴む。

例えそれがどんなに疑わしく、先の見えない、希望ですらないものであったとしても。

もつとも、そうなるように誘導した人物がいることは明白であるが。

さて、そのように略奪行為を繰り返してきた彼らであったが、その実訓練された兵と戦うのは初めてのことであった。

それは、憲兵との戦闘を避けてきたと言うこともあるが、逆に言えば憲兵の目にかからない様にしてきたと言うことでもある。

だが、そんな彼らもここにきて周囲の諸侯に知られる存在となった。言ってしまうえば欲が出てきてしまったのだ。

これまで彼らが襲ってきた村は、言うならば底辺に属する村。

諸侯にとっても取るに足らないような場所だった。

しかし、彼らとていつまでも同じ生活に留まってなどいられない。いつまた以前の様な生活に戻るともしれない状況で少し上程度の生活では安心などできるはずもなかった。

そして、彼らの様に食い詰めた者たちも合流し、徐々に大きくなる集団は危機感を覚えさせるのには十分であった。

そんな状況でそれまでの様に小さな村ばかり狙っていたのでは、全員に行きわたる益と言うのは雀の涙ほどしかない。

そもそもが、よりよい生活を求めている者たちなのだ。

程無くして、より大きな身入りを求めて襲撃の規模を大きくしていくこととなる。

まともに訓練を受けたことのない、素人に毛が生えた程度の彼らがいかにしてこれまでやってこれたのか、その答えは単純にしてある種真理と言つべきものがあつたからである。

数の暴力。その一言に尽きた。

単純な話である。100人の村を襲うなら500人で襲つてしまえばいいのだ。

たとえその半分しか頭数をそろえられずとも非戦闘員を含む数が相手となれば圧倒的戦力差である。

そうしてきた彼らであつたが、まさに今目の前にその真理の唯一と言つていい天敵が現れたのだ。

目の前の二人は言うなれば一騎当千。

相対していたはずの600もの兵が、その数を200にまで減らし、ていることから考えても言いすぎと言つことはないだろう。

数の暴力に屈しない方法、それはその差すら覆ってしまうほどの個人の質。

実際には一騎当千など為し得ることではないが、相対する二人の連携、そして賊軍の質の低さなどの要因が絡み合うことにより、対賊軍において暁達は一騎当千を為し得ているのだ。

さて、重ねて言うようだが賊軍は素人に毛が生えた程度の力量しかない。

それは、これまでまともな戦闘行為を行ってきたことがない、と言うことも大きな要因を占めている。

では、ともに戦闘と言うものを行ったことのない人間が目の前で200人以上の人間を斬殺する現場を見てしまったらどうなるだろうか？

答えは戦意喪失である。

ただでさえあり得ない数の人間が切り殺されていく現場を最前列で見続けた上に二人合わせて400もの人間が殺されたのだ。ただの二人に、である。

そんな様を見て逃げ出さない者などいはいはない。

それでも逃げ出さないのは”逃げ出せない”からだ。

あまりに唐突に与えられた恐怖に体が現実である、と言うことを拒否しているのである。

しかし、そんな逃避行動も長くは続かない。

非現実的な現実を現実であると認識したとき、体が現実的な逃避行動を始めた。

一人、また一人と自由を取り戻したことから我先にと退避しはじめる。

彼らの行動はよりよい生活をしたいため。生活、つまり命あつてのものであり、これまでの自分たちの所業のことなど捨ておいて、ただひたすらに遠くへ恐怖の来ない遠くへと逃げようとした。

だが、それは叶わなかった。

敵対する二人によってではなく、味方によって。

「おいおいおいおい。どこに行こうってんだ？相手はもう虫の息じゃねーか。あ？」

ずい、とそれまで後方にいた男が前へと向かってくる。他の賊に比べ一回り近く大きな体躯と、整えられた装備がその男が賊の中でも上の地位に位置する人物であることを示していた。

「か、頭っ・・・」

「なあ、おい。どうしたってんだ？ああ？早く斬りつけろよ！殺せよ！なあ！？」

「だ、だけ、どう！！」

「があっつつっ！！！！！！」

「ひ、ひいいい！！！」

「あー。剣が欠けちまつたじゃねーかよ！！！！つたくよ、どこまでも使えねえ愚図が！！！！！！！！！」

頭、そう呼ばれた賊は反論しきる間もなく逃げ出そうとしていた賊を斬り殺した。

続くように、後方にいた賊が逃げ出そうとしていた者たちを斬り殺していく。

「なあ、姉ちゃんよお。ずいぶん数減らしてくれたみてーだが、そろそろ体がきついんじゃないかねえのか？こんなザマになリたくなけりや降伏すんだな。それに・・・近くで見りゃあイイ女じゃねえか。クヒヒヒッ、そうしたら teme だけは助けてやるぜえ？勿論お礼

にその立派な体で一生俺たちに奉仕してもらおうがよ」

味方殺しのことなど気にした風もなく男は雪蓮へと近づいて行く。

この時、冥琳や暁であれば気付いたであろう。

男が味方殺しを始めてから彼女の眼が絶対の冷たさを湛えていたことに。

一歩、また一歩と近づいてくる男は気付かない。

同時に男と共に彼女に対する包囲を狭めていく賊たちも気付いてはいない。

彼女がいつの間にか俯き、剣を握りしめた手が震えていることを諦めや、疲労によるものと都合よく勘違いし、下卑た眼でこれでもかと言わんばかりに視姦しながら近づいていく。

気が付かないはずがないのだ。

男がその眼の奥の奥、思考の中において彼女に凌辱の限りを尽くし、最愛たる暁の殺害を夢想していることに。

怒りを抱かないはずがないのだ。

例え賊は皆殺しと決めていたとしても、味方を殺してさも当然という相手に。

何よりも、最愛の人のためだけに存在し、整え磨き上げてきた体を下卑た目線で汚され続けられていることに……殺意を抱かないはずがなかった。

「クヒヒヒッ。なあ、そんなに震えなくても良いんだぜえ。ヒヒッ、痛いのは最初だギイイイイ！！！！！！！！」

あくまでも彼女の様子に気づかず、安易に近づいてしまった男に待っていたのは報いであつた。

唐突に上がった悲鳴に、男と共に包囲しつつあった賊たちの誰もが何が起こったのか理解できずにいた。

「汚い」

呟くような声とともに、男の悲鳴が響く。

「汚い・・・汚い、汚い汚い汚い汚い汚い汚い汚い」

喧きはどんどん増えていき、賊たちにもようやく何が起こつてい
るのがわかり始めていた。

彼らが状況を呑み込めずにいる間にも悲鳴は途切れることなく続いていく。

[illegible]

そうしてようやく彼らは答えを出す。

男の体が消えていつていのである。

いや、正しくは彼女の振るう剣によって端から斬られている、と言
うのが正解であるが。

しかしながら賊たちにはそれを気付くことはできなかった。

彼女の振るう剣速をとらえることができない、という理由もあるが、それ以前に彼ら自体が飛来した矢軍により息絶えていったからである。

次々に死んでいく賊たちが最後に見たものは、開戦直後と変わらぬ異軍と、上半身を無くし最早足だけの存在になった男の姿であった。

3 side end

「あ――――き――――
――――っ――――」

馬鹿な男もいたものです。

彼女の誇りにつばを吐きかけるようなまねをするなんて、ね。
何を言ったのかはわかりませんが、あそこまですると言うことはよっぽどだったでしょう。

はあ。

なんだか今夜の睡眠時間が不安になってきました。

いえ、決して雪蓮が嫌と言うわけではなく、むしろ戦のあとの昂ぶっている雪蓮はいつもとは違う魅力があつてご褒美と言うか、ですが、冥琳もきつと対抗意識全開で来るだろうから、でもその前に体を清める時間が「暁ってば――」

「聞いてますよ雪蓮。」

あーもー。

こんなに汚して。

これはもう着れませんねえ。

掃除用の襦袢にするしかないですかね。

「あき、あ、あの「もー、こんなに汚して。まあ、そろそろ代え時だったのかもしれないね。帰ったら新調しに行きましょうか？」さっすが暁、冥琳とは大違いね、でねでね？二人つき「もちろん三人で行きましょう！？」暁「め！？冥琳！？」

「ふふふ。当然よねえ？し・え・れ・ん？」

「もももも、勿論よ！！！！ねっ？暁、私そう言ったわよね！！？？」

「ふふつ。そうですね三人で行きましょうね」

「まあ、いいわ。で？雪蓮、それはいつたい何の悪ふざけのつもりかしら。血の雨なんて私達のところには降らなかったはずだけど？」

まったく、冥琳は甘えん坊さんなんですから。

そんな風に言わなくつても私から言おうと思ってたんですけどね。

それにしても私も少し・・・そんなに押し付けないうでください冥琳・・・

「そーなのよ！！！！あんの下衆が――」

この場にはない趙雲殿のことは気がかりですが、虎に頼んであるの
で大丈夫でしょう。

ともかく元気そうで何より、です。

閑話・流れるかとどまるか（下） - （後書き）

恥ずかしながら帰ってまいりました……ネコヌマです。

四月から就活中でして、はい。

言い訳させていただきますとそんな次第でございます。

今現在受かった所はまるで無い訳なんですが……

気づいたら投稿開始から一年が経っていたこともあり、今回投稿に至ったしだいであります。

さて、本編、と言いますか今現在閑話なわけですが、次回をもちまして過去編終了となります。

前回の予告では今話で終了の予定でしたが、文字数がよくわからない感じなりまして……結果、分割しての投稿、と言う形をとらせて戴く次第です。

因みに、もうじき、と言うよりか13に誕生日となるわけでそれまでにいろいろとやらかそうと企てております。

さて、最後になりますが、このような文を読んで頂きありがとうございます。

次回も皆様の暇つぶし程度に読んでいただければ幸いです。

では、ネコヌマでした。

閑話・太陽を生む・（前書き）

皆様こんにちわ。

ネコ又マでございます。

活動報告や、前話でも書きましたが・・・・・・覚悟は良いですか？

自分は出来てます。

では、どうぞ。

あ、ちなみに無糖です。

閑話・太陽を生む・

side 趙雲

賊の討伐・・・むしろ殲滅が終わり、街へと向かっていた私は、顔まで隠した全身黒ずくめに連れ去られる形でここ、城の一室へとやってきた。

どうにも彼女、声で分かったのだが、の言うことには戦場での私の行動に言いたいことがあるのだと言う。
確かに今日の私は無様と言うほかない醜態をさらしてしまっていたので、連れられるがままにされた。

のだが・・・

「貴様ら！！我等の主の名を言ってみろ！！！！」

「程禁！程禁！！！！」

「違うだろうがっ！！！！この馬鹿どもがつっつ！！！！いいか！！てー、で振り上げて、きん、で下せと、何度言ったらわかるんだ！！！！？それではきんてーになるではないか！！」

「程禁！！！！申し訳ありません！！！！隊長！！！！」

「謝れば済むと言うものではない！！！！いいか、これは即ち貴様らの程禁様への想いが足りていないと言うことになるのだぞ！！！！？？」

なんだろう、これは。

そもそも、この城の主は孫策殿ではなからうか？

「そ、そんな……」

「何かの間違いです!!!!!!」

「そうです……！！撤回してください……！！」

「あ、ありえないですよ」

「程禁様への想いなら隊長にだって負けてませんっ！！」

指摘され、口々に反論していく隊員たち。

だが、どうにも言ってはならぬ事を言ってしまったようで、しだいに顔を青ざめさせていく。

「あつ！……！……！……！……！……！……！……！」

「ほおう……よくも吠えたなあ……そこに直れっ!!!!」

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

「はっ、はいつ！」

そう言われ、子義に一括され整理していく。

子義、名を太史慈という。私をここまで連れてきたものの名だ。そしてこの部屋に集まっているのは彼女の部隊だと言う。

それにしても、一体何をするつもりなのかとついじろじろ見てしま
う。

この部隊、部屋に集められている人物は皆見目麗しいと言っている
ものばかり。

いっそ、そう言った部隊なのかと邪推してしまいそうになるほどだ。

私自身こうした不躰な視線を送ることに慣れていたつもりだったの
だが・・・いやはや、何んとも精進不足だったようだ。

どうにも彼女たちに視線を送るのは恥ずかしいと言うつ、むしろ見
てはいけないのではないかとすら感じてしまう。

子義が私をここへ連れてきたことから考えて、見てはいけないと言
うことはないはずなのだが・・・何んとも見てしまったら引き返せな
くなるような、そんな気がしてならない。

「いいか！！副長が名誉隊長のところに行つたからと言って我々が
立ち止まることは許されない。そこまで言つのであれば試してやる
う。」

そう言うが早いか、子義はズイツと整列しているものたちの前、そ
の中の一人を選び、その眼前に進み出た。

「言え」

ただ一言そう言った。

何を、とも言わずにただ一言、それだけだ。

それだけでは通常会話はなりたない。

さらには声をかけられたのは、まだ少女と言っていていくらの年齢のものだ。

見れば、俯き震えている様子。

おそらくこの部隊がこんなにも可笑しな所とは知らずに配属されてしまったのだろう。

どうにも不憫だ。

規則違反になってしまいかも知れんが、ここは何か声をかけてあげべきだろう。

しかし、何んとかければよいやら。

「私の朝は程禁様専用の眼鏡をかけるところから始まります。今私は程禁様のお傍係を拝命していますのでお清めに使われる水をご用意してお持ちします。この時程禁様が優しく『おはよう』と言ってくださいるのでそのために眼鏡を取り換えておくのです。普段用のものではばやけて程禁様のお顔がよく見れませんのでその時だけは専用のものを装着します。その後、程禁様のお使いになった水に少しばかり後ろ髪を引かれながらお食事の配膳を行います。この時程禁様の分のお食事は自分で味見を行うのも忘れません。万が一、い億が一間者が入り込んでいた場合、あのように素晴らしい程禁様に危険が及ぶのは確定的なことと言えますので、気を抜くことはできません。勿論、程禁様のついでに孫策様と周瑜様の食事も味見するのも忘れません。一応形式的には我々の主となっているのだから仕方ありません。それに、程禁様が大切にされている方たちですので何かあれば悲しむのは程禁様となります。そのようなことがあればこの世に生きて居させていただいている価値すら私にはありません・

……ですので念入りに言うのは至極当然のことです。」

一瞬何が起ったのか分からなかった。

プルプル震えていた少女がいきなり顔をあげたかと思えば熱に浮かされたかのような表情で程禁殿に対する愛を語り始めた。

私はわけがわからなくなり呆然としてしまったが、おそらくそれは周囲も同じだろう。

まさか『言え』の内容が”程禁殿に対しる愛を語れ”などと言うイカレたない様なはずがない。

この少女は真面目そうな娘だから、おそらく疲れているのだらう。

そう考えると少しかわいそうに感じてきた。

きつとこのふざけた環境にいるうちに知らず知らず疲れをためてしまったのだろう。

これは周りに便宜をはかってやらねばなあるまい。

おそらくかなりひいているだろうからな。

そうして周りを見回した。

[illegible]

「……そう言えば今のお傍係はこの子だってこと忘れてた。

「ああん。程禁様あ、だめですよーこんな人気の多い場所でなんてえー」

「私だって程禁様に水運んであげたいのに・・・」

だめだこいつら・・・・・・・・・・まともな奴が居やしない。

そして、私は考えることを放棄した。

やたら遠くで聞こえる「汗をぺろぺろしたいお」という言葉がやけに耳に残った。

「おい、きいてるか？おい！！？」

「ん・・・ああ、勿論だとも。ぺろぺろしたいな。うん。」

あれ、何故こんな言葉が？

「うんうん。そうかそうか。漸くお前にも程禁様の良さが分かったか。」

「ああ。甘いにおいがたまらないな」

何故だろうか・・・・・・・・・・程禁殿の甘い体臭ハアハア・・・

「そうだろうそうだろう。で、だ。」

そう言う就先ほどもでの表情とは打って変わって、真剣な目で私を見ってくる。

「今日のお前の戦いぶりだが、反省できたか？」

「ああ、勿論だ。そもそも、文官の程禁殿に前線まで出張らせてしまっていたのだから当然だろう。何より、程禁殿の体に傷でもつけてしまっていたらと思うと泣きたくなる。」

あれ、なぜだろうか。

思考の所々がおかしい様な。

それにしても、今思い出しても程禁殿はなかなかでしかない力量だったと思うのだからなあ。

「まあ、お前の考えていることも分かる。当然のことだからな。我々から見ても戦闘に関して程禁様はそこまでの才能をお持ちではない。だが、それよりも我々は程禁様に戦場に出ていてほしくないのだ。無論、それを程禁様に進言するようなことは私にはできない。あの方が戦場に出ると言うことが兵にとっても、勝敗にとっても必要なことだと言うことは解っているからな。」

そう言う、子義の眼はこれ以上ないと言うほどに真剣で、私には返す言葉などないように感じた。

「何よりも、だ。あの方は長時間戦場に立つことができないのだ。いや、正確に言えば”戦闘”を行うことができない、か。詳しいところは解っていないが、連続で戦闘を行うと一刻程しか持たないそ

うだ。ああ、決して命に関わると言うことではないぞ。ただ気を失ってしまふのだ。ふっ、と糸が切れるかのようにな。」

「なんと！？それでは戦場に出すのは拙い・・・というよりも今回はかなり拙い状況だったのではないのか・・・？」

「いや、今回程度の相手であれば何ら問題はないのだ。現に、つい先ほどお前が無事かどうか私に確認してこられるほど余裕がおりようだった。」

そうか、それはなにより・・・

「来て・・・いたのか？」

いや、しかし私はなにも気付かなかったぞ。

「それはまあ、お前は教い・・・んんんっ。ポケットとしていて気付かなかったのだろう。」

そうなのだろうか。

事実として、思考が停止していたのもあり強くは追及できないな。

「そうなのか・・・それはお恥ずかしいところを見せてしまったようだな。」

「まあ、気にするな。程禁様も気にしてはおられなかったようだったからな。」

なら良いのだが・・・

「それと、だ。今回の賊に関してだが、追撃戦を行うことが決定した。どうやら、孫策様が殺した男が頭ではなかったらしい。一握りの捕虜に尋問していった結果判明したことだが、奴と同時期に村々にやってきた男がいるそう。聞き出した容姿の特徴などを踏まえて考えると、どうにもそいつが黒幕で間違いないだろう。」

「なるほど、所詮力だけしか能のない男だったと言うわけか。それで？追撃戦はいつ行うのだ？」

「ひと月後となっている。追撃と言うには日が開き過ぎているが、こちらは本拠地で戦うわけではないのだ。十分に情報を集め、危険は最小限にしなければならぬ。兵たちも微少ではあるが怪我をしたものもいる。それらを踏まえてそうなった。」

つまり、大事をとってと言うことが。

「ふむ、理解した。それで、私はもう部屋に戻ってもいいのだろうか？」

流石に初陣の疲れと言うものはあるしな。

「ああ、構わないが、その前に程禁様のところに顔を出しておけよ。それなりに心配なさっていたからな。」

「……何かがはねた気がした……が、気にすることではないだろう。」

「わかった。して、どちらに伺えばいいか？」

「この時間であれば執務室にいらっしゃるだろう。」

「そうか、ではそちらに顔を出してからにするとしよう。ともかくきょうは世話になった。」

「ああ。」

そうして、部屋を後にしたわけだが、驚いたことにこの部屋は程禁殿の執務室のかなり近くに位置していた。

そんなことも気が付かないほどだったのか、とあの時の自分に苦笑してしまう。

コンコンッ

「はい、どうぞ。」

「趙雲入りますぞ」

「ああ。趙雲殿でしたか。今日は大丈夫でしたか？」

「ええ。それはもう。」

ああ、甘いにおいがするな

閑話・太陽を生む・（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
ネコヌマです。

今回で過去編は最後なわけですが、オリキャラです。
前から出ていたキャラではありますが、今回から正式に参加となります。

あと、まったく甘くないですね。
甘党の自分としては異常なほどに。

星はこの時点では恋心は微妙です。
ある程度の精神誘導みたいなことされてますが、まだ足りません。
そんな簡単に落ちるような要素なんてないですね。
その様子とかはその都度閑話等で。

因みに例の部隊には・・・いますよ。
ええ。かなり。

今作最高のキャラ崩壊がね。

では、こんなところで。
次回もよろしく願いします。

ネコヌマでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9894m/>

廻らない世界

2011年8月14日01時03分発行